

73

years

The Fukuyama
Medical Association School of Nursing

福山市医師会看護専門学校のあゆみ **1**
准看護科73年の軌跡



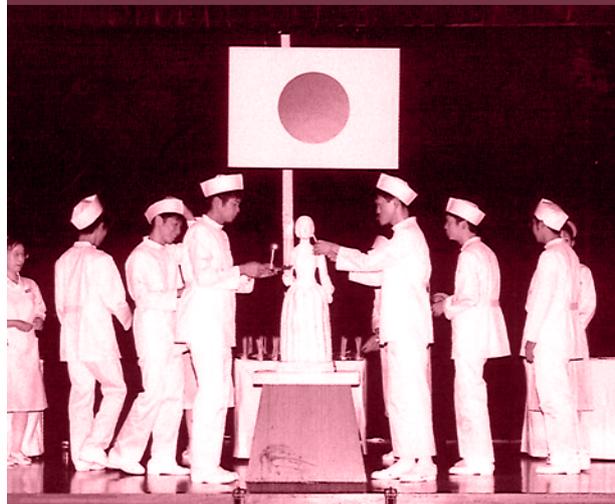
73 years

The Fukuyama
Medical Association School of Nursing

福山市医師会看護専門学校のあゆみ 1 准看護科73年の軌跡

目 次

■ 巻頭言	
福山市医師会 会長 西岡 智司	2
学校長 大石 豪彦	3
■ 閉科に寄せて	
福山市長 枝広 直幹	4
広島県医師会 会長 松村 誠	5
■ 寄稿文.....	6
■ 准看護科の変遷、学校の沿革	28
■ 入学者・卒業者数	34
■ 〈座談会〉准看護科73年の歩みを振り返って ...	36
■ 人間性豊かな看護をめざして	
教育課程・教育理念	54
令和4年度 新カリキュラム.....	55
准看護科 教育課程の変遷	56
73年間 お世話になった実習施設.....	57
歴代の学校長.....	58
教職員名簿.....	59
福山市医師会看護専門学校校歌.....	64
■ 写真と振り返る思い出	65
編集後記	





福山市看護専門学校のあゆみ ～准看護科 73 年の軌跡～

福山市医師会 会長 西岡 智司

福山市医師会看護専門学校は、開校以来 70 年以上の長きにわたり、医療介護分野における人材育成に取り組んでまいりました。その間、会員医療機関への看護人材供給を最重点課題とし、地域に根ざした医師会立看護学校として運営してまいりました。このたび、歴史ある准看護科の閉科という大きな節目を迎えるにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

福山市医師会看護専門学校の黎明は、明治 41 年の有志医師たちによる私立福山産婆看護婦養成所の設置に遡ります。准看護科としては、昭和 27 年に福山市医師会附属准看護婦養成所指定を起点とし、幾度かの名称変更を経て、2011 年に現在の高等課程准看護科として継続してまいりました。准看護科は働きながら 2 年間で資格取得できるため、様々な背景を持つ学生を受け入れて教育してまいりました。30 年以上連続して合格率 100% を達成しており、現在まで 6000 名以上の卒業生を輩出し、地域医療を支える大切な資源となりました。

しかしながら近年では、少子化に伴う高学歴志向が強まり、周囲に看護系学部を擁する 4 年制大学の存在の影響も非常に大きく、准看護科の受験者数は減少の一途を辿り、定員を確保するのに苦慮する事態となりました。それに輪をかけて看護教員不足等の複合的な影響も重なり、現状の 3 課程の維持が大変困難な未来が近い将来予想される事態となりました。生徒に対して十分な教育環境を提供することが困難となる状況を避け、持続可能な運営形態を模索した結果、苦渋の決断で令和 4 年の臨時総会に上程し、課程再編を決定いたしました。

医療介護をめぐる状況は、ドラスティックに変化しております。准看護師の養成については、全国的にも医師会立看護学校が担っている割合が非常に大きいですが、医師会立看護学校の置かれた状況は、全国的にも非常に厳しい状況になっています。我々も地域に看護人材を安定的に供給し続けることを大命題に運営してまいりました。准看護科が現在まで福山市の医療・介護現場において果たしてきた役割は非常に大きく、閉科となることは非常に寂しいことですが、卒業生の皆様には心からエールを贈り、皆様が本校の卒業生であることを誇りに、これからも職責に邁進していただければと思います。

今後、福山市医師会看護専門学校は、第一看護学科（専門課程看護師 3 年課程・全日制）の定員を増員し、多種多様なニーズに応えることが出来る看護人材の育成を継続してまいりたいと考えています。

最後に、これまでの長い間、准看護科を温かく見守り、ご指導、ご支援いただいた歴代の学校長、教職員の皆様、実習病院の皆様には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。閉科のご挨拶といたします。



准看護科閉科に当たってのご挨拶 ～そして未来へ～

学校長 大石 豪彦

戦後設けられた甲種・乙種看護婦が一本化され、新たに准看護婦制度が発足したのは、日本が丁度、戦後の混乱期から漸く抜け出そうとする1951年（昭和26年）のことでありました。本校は時を同じくして、その翌年、県知事から「福山市医師会附属准看護婦養成所」の指定を受け、これが福山市医師会の准看護師養成事業の嚆矢となりました。

爾来73年の弛みない歩みの中で、医療・介護・福祉など各現場に向けて数多くの看護人材を送り出し続けることが出来ました。

これも偏に、准看護師の養成に情熱を傾け、これまで一方ならぬご指導やご尽力を賜るなど本校の礎を築いてこられた先人や諸先輩の方々をはじめ、教職員はもとより、日々の看護業務で大変な中を本校の生徒のために熱心にご指導くださいました各臨地実習施設の皆様、外部講師の方々、また多くの関係者の皆様に支えられたお蔭であると、心より厚くお礼を申し上げます。

看護の歴史を振り返るとその変遷は古く、洋の東西を問わず宗教、思想、科学、医学の存在が多くの影響を与えてきました。日本においては史実としては仏教伝来に遡り、光明皇后の時代、悲田院や施薬院などで貧困者や傷病人、老人の救済・看護にあたっていたとされています。そして、時代を経て近代看護が確立され、19世紀後半になってヨーロッパから現代の看護教育が日本に伝わり、明治時代がその始まりであると考えられます。

近代看護とは、病人の介助や世話をする単なる看病人ではなく、ヒューマニズムの上に立ちながら、刻々と進歩する科学的根拠に基づき、人々の健康増進、疾病予防、健康回復や苦痛の緩和を目指すことにほかならないと思います。

本校は近代的な看護教育の実践のもと、将来の地域医療を担う熱意と行動力のある看護職の育成を目指し、これまで長年に亘り地域に貢献する准看護師や看護師を養成する教育機関として、その役割を担ってまいりました。

しかしながら、学校を取り巻く状況は、少子化や若者の大学志向などを背景に年々厳しく、福山市医師会は、中長期的な視点に立って今後の看護学校のあり方について判断する必要に迫られ、検討を重ねた結果、現在の三課程のうち准看護科と第二看護学科を順次閉科することとし、3年後には全日制3年の看護師養成課程に一本化することといたしました。

もちろん、これらの閉科については非常に寂しさを感じますが、将来の本校の看護教育を見据えたとき、看護に携わる人材を将来に亘って安定的に輩出していくための方策として避けられないと考えています。

今後も地域に立脚した看護学校として、質の高い教育を継続し、地域に貢献出来る看護師の養成に全力で努力してまいります。改めて、本校のますますの飛躍を誓うとともに、これからも卒業生の各方面での活躍を願ってやみません。

最後になりましたが、皆様からの今後引き続いてのご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。准看護科閉科に当たってのご挨拶とさせていただきます。



福山市医師会看護専門学校准看護科の 閉科に寄せて

福山市長 枝広 直幹

このたび、福山市医師会看護専門学校准看護科が閉科することとなりました。これまで教育活動に尽力された教職員を始めとする関係者の皆様に深く感謝申し上げます。多くの卒業生が地域医療の現場で活躍し、私たちの健康と福祉に貢献されていることは、誠に意義深いものであります。

振り返れば、1908年（明治41年）に前身である私立福山産婆看護婦養成所が設置され、長年にわたり地域医療の基盤を支える優れた人材を育成してこられました。特に、准看護師の養成につきましては、戦後間もない1951年（昭和26年）に准看護婦制度が創設された際、福山市医師会附属准看護婦養成所に改称され、以降73年間にわたり6,000人以上の卒業生を輩出されました。その実績は、地域社会において高く評価されているところであります。

1990年（平成2年）には三吉町に校舎を移し、本市の保健医療福祉の中核である「福山すこやかセンター」とより密接な連携が図られるようになりました。看護師確保策の立案にあたり、生徒の意向調査等、多くの協力をいただき、政策に反映することができたと考えております。

本市では、看護職員への就職支援策として、2019年（令和元年）7月にナースセンターサテライト福山を誘致したほか、経済的に困窮する学生や社会人看護学生への支援金制度、地元就職相談会の開催など様々な施策を実施しており、引き続き看護職員の確保や支援に取り組んでまいります。

さて、近年、医療の高度化・専門化・多様化やチーム医療の推進など、医療を取り巻く環境が大きく変化しています。また、少子化や若者の高学歴化により准看護師を希望する人は著しく減少し、それに伴って、全国的にも、准看護師養成所の数は大きく減少しています。こうした情勢の中、御校は閉科に伴い学科を再編され、2025年度（令和7年度）からは第一看護学科の定員を20名増員し、引き続き地域に貢献出来る看護師の養成に力を傾注されるとお伺いしております。

これまで連携して看護師の確保に取り組んできた本市としては、学科の再編を新たなスタートととらえており、これまでの成果を礎にさらなる発展をめざされることに大きな期待を寄せています。今後とも、地域医療と看護の発展にお力添えいただきますようお願い申し上げます。

最後になりますが、御校のさらなるご発展と、皆様方の今後のご健勝とご活躍を祈念申し上げまして、閉科にあたりましてのご挨拶といたします。



福山市医師会看護専門学校准看護科の 閉科に寄せて

一般社団法人 広島県医師会 会長 松村 誠

福山市医師会看護専門学校准看護科が令和7年3月をもって長い歴史に幕を下ろされます。これまで准看護科の教育に携わられた福山市医師会役員と学校関係者の皆さま、そして卒業生の皆さまに敬意と感謝を込め、ご挨拶申し上げます。

福山市医師会看護専門学校は、明治41年に私立福山産婆看護婦養成所として開校されて以来、今日まで時代に即応した看護学教育に徹し、数多くの優秀な看護人材を輩出してこられました。長い歴史を持つ貴学は、第二次世界大戦の中で福山大空襲を経験され、建物とともに貴重な学校資料を失われました。「広島看護の歴史」ともいえる貴学の資料が失われたことは我々にとっても大きな損失であり痛恨の極みであります。しかし、戦後ゼロから再始動した79年間の中で、8,500人もの看護職を輩出された実績は、福山市の保健・医療・福祉を担うのみにとどまらず、広島県そして、日本の看護界においても大きな力となったことと存じます。

「看護」に携わる人材を育成することは、保健・医療・福祉に関する知識・基礎看護技術の修得に加えて、豊かな人間性や包容力、人としての成熟が求められます。現在、少子高齢化という問題を抱える我が国において、全国的に臨地実習施設の確保が難しくなっており、人材不足や学生の学力低下など様々な問題が散見されております。そのような状況の中でも、貴学は総合病院を中心に訪問看護ステーションや市立保育所などの機関から全面的な協力を得て、学生たちに質の高い実習機会を提供されております。さらに、准看護師試験においては30年以上連続で合格率100%を維持されるなど、素晴らしい結果を残されました。

このように長きにわたり、地域医療を支える看護人材を養成してこられた実績は、まさに歴代校長をはじめとした教職員の皆様方が、弛むことなく努力を積み重ねてこられた成果です。このたび准看護科は閉科となりますが、今後は看護師課程に集約し教育の伝統を引き継いでいかれますので、これまで以上に質の高い看護教育を実践されることと、確信いたしております。

本会といたしましては、広島県行政への提案要望の中に最重点項目として「医師会立看護学校の存続に向けての支援」を盛り込み、専任教員養成講習会の県内開講の再開、医師会立看護学校に対する支援の充実、准看護師制度の堅持について、広島県に要望してまいりました。厳しい社会情勢ではありますが、今後とも行政に対して医師会立看護学校の支援について働きかけていくとともに、医師会立看護学校の皆様と一丸となって広島の医療を守ってまいります。

末尾になりましたが、大石豪彦校長をはじめ貴学の教職員の皆様方が、これまで准看護科の存続に注力し貴重な人材を育成してくださったことに、心より感謝申し上げます。貴学の今後ますますのご発展を心より祈念し、ご挨拶とさせていただきます。



華麗なる学校長の教えを胸に

看護学校担当理事 奥村 みどり

私は十数年前に福山の今の職場に転勤して来ました。当然、福山の医師会事情も当時全く知りませんでした。しかし、勤務先の上司が福山市医師会看護学校の校長先生をされていて看護学校のお話をよくしてくださっていました。上司は今もすごい情報通なのですが、当時は学生・生徒さんの状況から学業の進展具合、講師の先生や教員の皆さんの人間関係などまで本当によくご存知でした。ほどなくして私が講義を担当するようになった際には「講義の極意は3つ。講義は短時間で（時間いっぱいするな）、インパクトの大きい内容で、講義を聞いて当院に就職したい、と思わせることよ。」とまず言われました。当時若造だった私はそんなの絶対ムリムリとちょっと聞き流し気味、それでもインパクトとダラダラ講義を延長しないことだけは心がけたつもりだったのですが、看護学校担当理事になった今、考えると、この極意こそが学校側にも学生側にも講師側にもメリット大の、まさに講義のあるべき姿だなあと思います。

また上司は、校長として戴帽式や入学式、卒業式などで挨拶をすることが度々あったのですが、非常にたくさんの文献（website?）を検索されて内容を推敲され、看護という仕事に思いを馳せ、憧れを抱けるような感動的なスピーチをされていました。学生・生徒さんや保護者はおろか、下手したら教員や取材のマスコミの方までが感涙にむせんだ、と噂に聞いています。そのような素晴らしい元校長が率いる当院のスタッフへの教育はかなり（き、厳しく）行き届いており、手前みそと言われるかもしれませんが、スタッフの優秀さは際立っていると思います。そして当院自慢のこのスタッフたちのほとんどがここ福山市医師会准看護科卒業の准看護師です。皆、仕事ぶりは無駄なくスピーディーでありながら正確で、周囲の配慮気配りが十分でき、明朗で、新しい技術や知識を貪欲に吸収したり情報を集めてくれたりしてくれます。彼女たちの働きのおかげで当院ではクリニックであり得ないほどのオペや分娩件数をこなせているのだと納得しています。学校での学修はもちろんですが社会で働き出してから経験や学びがその後の人生を素晴らしく輝かせてくれると思います。当院の元校長の教育はさすが素晴らしく、そして卒業生であるスタッフたちが自ら学ぶチャンスを活かす積極性や行動力を築いてくれたのが、まさにこの看護学校准看護科での日々であっただろうと思います。そしておそらく福山市内には同様に素晴らしい准看護師の皆様がたくさん勤務されていることだと思います。このような素晴らしい准看護科が閉科となるのはとても残念だとは思いますが、今後も当校卒業生の皆様、この学校の素晴らしい教えを胸に素晴らしい世界に羽ばたき活躍されることを祈ります。



福山市医師会 准看護師存続運動の思い出

第4代校長 大田 浩右

来春、福山市医師会看護専門学校 准看護師養成コースが70数年の歴史に幕を下ろすは、誠に残念なことです。当時、医師会代表であった私は、准看護師制度存続に鋭意取り組みました。若かりし頃、チューリッヒ大学附属病院に学んだ経験があります。ドイツ語、英語、フランス語の入り混じった会話ストレスの最中、私を理解し優しく接してくださったのは、ナースエイド看護助手と呼ばれる人たちでした。彼女らの多くは移民または出稼ぎでした。中でもポーランド系の人たちは質素で親切でした。歴史ある看護の階級社会における重みと誇りを支えていたのはナースエイドの人たちでした。彼女たちは、医療行為はできませんが、安らぎの看護の広い裾野をしっかりと支えていました。ナースエイドなしに看護の世界は成り立たない、が私の受けた印象でした。この印象が私の准看護師制度存続運動の起点となり、原動力となりました。

平成の時代に入り、日本看護協会とメディアによる准看護師制度廃止論は野火の如く日本全土を覆い、弱体化した日本医師会はなすすべもなく、准看護師不要論は世論となっていきました。危機感をもった私は、多くの厚生官僚が目を通す社会保険旬報に准看護制度の必要性を説いた一文（社会保険旬報 No.1942.97.3.21 招待寄稿, 准看護婦制度に思うこと）を寄稿しました。看護の道には多様な選択肢があった方がよいとの私の持論に賛同下さった、旬報編集長高木安雄氏とは生涯の友となりました。

当時の看護の世界には二人のリーダーがおられました。日本の看護界で第一人者と言われた、厚生省健康政策局の保健指導室長から看護課長になられた久常節子氏と面談し、准看護師制度の必要性について私の考えを述べました。器の大きな方で、その後日本看護協会会長を務められました。看護の世界のリーダーとして、もうひとり、山田里津氏の存在がありました。三井記念病院 ICU に訪問し、准看護師制度の必要性と国家資格化について話をさせていただきました。准看護師制度存続に100%賛成をいただいた日本看護学校協議会会長山田里津先生からはご厚誼をいただき長いお付き合いとなりました。福山にもおいでいただき、私の病院の看護部長を中心に食事会や鞆の浦観光など深いお付き合いが続きました。久常節子、山田里津の両氏との面談は、医師と看護師は対等の立場であるとの新しい価値観を私に植え付けました。久常氏は2013年、山田氏は2015年にフローレンス・ナイチンゲール記章を受章されました。

時は流れ時代は大きく変わりました。政府は看護助手（ナースエイド）を国家資格とすることなく、ひたすら各地に看護大学を増やしていきました。病院から家族付き添いの姿は消え、准看護師も少数派となりました。患者目線から看護の質は良くなったのでしょうか。長年の闘病を経験した私にとって、今の看護は良くなったとは思えません。稿を終えるにあたり、平成8年12月19日、福山市医師会看護専門学校准看護生徒署名者一同で、厚生省准看護婦問題調査検討会宛に提出した「准看護制度廃止論に対する反論について」は歴史的に貴重な資料と思います。



ありがとう 福山を支えてくれた、 准看護師 6179 人

第 8 代校長 安藤 尚子

“准看護師制度”は、第二次世界大戦後、急激な病院増加により、看護師の需要が増大する中、看護師を補助する資格として発足しました。2 年間の定時制で資格取得でき、都道府県知事認定により、資格取得出来る制度です。今日まで准看護師の皆さんが私達の健康を支えてきてくれました。

時代は流れ、徐々に医療専門性の需要が高まり、より濃厚な専門知識の修得が必要になってきました。さらには看護師に比べて待遇面の違いもあり、20 年くらい前より日本看護協会を中心に“准看護師制度廃止”が提唱されてきました。

最近、看護学校（全日制 3 年）や、4 年生の看護大学も増加、さらには、急速な少子化が拍車をかけ、若い人達の准看護学校への進学離れも広がってきました。

人口 46 万人の中核市福山には、看護師養成可能な大学病院も、看護学校を有する巨大病院もありません。広島県や福山市より多くの助成金を毎年いただきながら、福山市医師会、平成大学、福山医療専門学校の 3 施設で看護に携わる人達を育てて来ました。

卒業後は、都会に憧れ、東京・大阪などの大都市圏にブラックホールのように吸い込まれて行く看護師さんも少なからずいて、福山で活躍し続けてくれるとは限りません。

一方、准看護科の皆さんは、卒業後、ほとんどが地元福山に残り、福山市民の健康を支えてくれました。

大きな時代の流れにより、准看護科が閉科されることになりました。今後、看護要員の減少は明らかです。大変心配です。今後、福山市医師会看護専門学校（全日制）卒業の皆さんこそが、卒業後も福山に定着し、福山の人々の傷病者を支え健康を守ってほしいと心より願っております。病院も診療所も介護現場も、看護師さんたちが福山で活躍したいと思えるような環境を提供する努力は、より一層、必要になると思います。

私は福山市医師会看護学校で授業、学校担当理事、校長等の役割に 25 年余り、関わらせていただき、教育現場を多々見ておりました。日々教職員の皆様と関わって来ました。

教育現場での努力を弛みなく継続されて来た教員の皆様に心より敬意を表します。在学中の生徒さん達の中には、志し途中で、心の折れてしまいそうな生徒さん、家庭の事情で退学を申し出た生徒さん、勉強についていけない生徒さん達も少なからずいます。彼ら彼女達に常に寄り添い、励まし続け、資格取得まで叱咤激励し、応援し、さらには資格取得後も長期に渡り相談に乗ってくれました。教職員のこのような支えがあってこそ本校の卒業生が他の学校に比べて准看護師資格試験合格率が常にトップであったことも忘れていただければ幸いです。

ありがとう 福山の医療を支えてくれた准看護師 6179 人



我以外皆我師也

副校長 森 泰久 (2005年～2011年)

タイトルの漢字は、作家・吉川英治さんの言葉で、「我（われ）以外皆（みな）我（わが）師（し）也（なり）」と読みます。学校勤務を長くして分かったことですが、教員は専門教科を生徒に教えるだけではなくて、生徒やその保護者から、新しいことを教わる機会もたくさんありました。そんな時いつも、教師冥利に尽きると感じて嬉しく思いました。

私は、2005（平成17）年4月から2011（平成23）年3月迄看護学校に勤務しました。医療高等課程准看護科と医療専門課程看護科の2課程の時代で、一学年の定員はいずれも80名でした。6年間をふりかえり、今後の看護学校に期待することをお話しします。

生徒たちと初めて対面したとき、資格取得という自分の目標達成のために、生き生きと学校生活を送っているという印象を受けました。そして、生徒の年齢層が10歳代後半から50歳代までと、幅広いことにも驚きました。これまで勤務した高校とはずいぶん異なる教育環境で、「我以外皆我師也」の精神を新たに学べる学校だと思いました。実際、社会経験豊かな生徒たちから多くのことを教わりました。

在任中の最も大きな仕事は、看護学校改組と新課程開設準備作業でした。全日制3年課程設立申請の経験を持つ松山看護専門学校、姫路市医師会看護専門学校そして学校法人ベル学院看護学科（岡山市）を訪問して、ご教示を受けました。

2010（平成22）年7月に設置申請書を厚生労働省へ提出し、同年12月末に設置認可の通達が届きました。作成した書類はA4版用紙2千枚を数えていました。一緒に作業した教職員の皆さん、協力してくださった医師会事務局や先進校の皆さん、そして指導助言を受けた県医務課や厚生労働省中国四国厚生局の皆さんに、改めてお礼申し上げます。

この他、本校が主幹校となって、中四九地区医師会看護学校協議会を福山で開催できたこともうれしい思い出です。2005（平成17）年8月、2日間にわたって各校の現状報告や課題について協議が行われました。

しかし、残念ながら実現できなかった計画もあります。それは、教員並びに学生が数名ずつ、計画的にハワイ州の看護学校や病院を訪れて見学・研修を行うという試みです。「特色ある学校づくり」の一環として原案を作成し、校長先生に素案を見ていただきました。ハワイ・パシフィック大学看護課程の見学と、総合病院ハワイ・クアキニ病院で老人看護の研修をするという内容でした。

全日制3年課程新設という大きな仕事が舞い込んできましたので、この研修計画は日の目を見ることはありませんでした。しかし、将来いつの日か、海外の看護師養成機関と交流する機会に恵まれ、国際感覚豊かな看護師養成学校に成長することを願っています。

看護学校の今後ますますの発展と、関係者各位のご活躍をお祈りいたします。



副校長としての3年間

副校長 佐藤 正 (2011年～2014年)

准看護科 73年の長い歴史の中、わずか3年間の短い期間ではありましたが福山市医師会看護専門学校副校長としてお世話になりました。前任の森泰久副校長の後任として2011年4月に着任しました。その年には第一看護学科が新設され、准看護科、第一看護学科、第二看護学科と三学科がそろい医師会看護専門学校の勢いを感じさせる年でした。

その年3月に県立学校を定年退職してすぐの再就職でした。学校には違いないが、高等学校と看護専門学校とでは教育内容も異なり戸惑うことが多かったように思います。職員の先生方にいろいろと教えを受け、支えていただきながら、学生・生徒の皆さんと共に歩んできたように思います。

学生・生徒の皆さんの前に立つのは始業式、終業式、隣地実習先での開始式、各種行事などでのあいさつの時が中心でした。どんな挨拶をすればいいのか？悩んだものです。ただ、いつも私の心には「心は誰にも見えないが、心遣いは見える。思いは見えないけれど、思いやりは誰にでも見える。気持ちは行いになって初めて見える。その気持ちをカタチに！」の精神が少しでも学生・生徒に伝わるように話したつもりです。また、准看護科の教室には心に触れる言葉を書いて掲示したこともありました。生徒もよく見てくれていたように思います。

生徒の皆さんの前に立つのは挨拶・講話だけでなく、授業でも准看護科の「看護と倫理」「患者の心理」の2科目を受け持ち、退職後も数年続きました。「患者の心理」の授業では私の4年間にわたる妻の闘病生活（急性骨髄単球性白血病）の体験をもとに実際の辛い経験を通じての授業を展開しました。私の授業に真剣に耳を傾けてくれて嬉しかったことを思い出します。

授業の内容でいろいろと先生方に相談して展開しましたが、特に困ったのはテスト問題の作成でした。もともと私は数学の教員だったのですが、看護の試験問題を作成するとなると不安だらけでした。何とか試験の実施もできほっとしたことを思い出します。

修学旅行での国立療養所長島愛生園の訪問は強烈な印象を受け、その後書籍などで学習し授業にも生かしていったことを思い出します。

38年間の高等学校での教員生活とはまた異なる環境での教員生活3年間でした。人生において、よい経験をさせてもらえたことに感謝しています。

准看護科は閉科となりますが、福山市医師会看護専門学校はますます発展され地域に貢献されますように祈念しています。



准看護科の歩みを振り返って

元准看護科教務主任 松岡 伸子
(2000年～2006年)

医療看護（介護）分野に貢献する人材を養成する教育機関として70数年間立派にその役割を果たしてこられました。そして多くの卒業生が地域医療のなかで健康を守り、病んでいる人の世話をされていると思います。准看護科の入学生は最初、中学校・高等学校卒業と同時に入学する現役の生徒でしたが、途中から社会人として働いてきた人達が入学する社会人入学へと少しずつ変わってきました。

私がこの教育機関に携わらせてもらったのは27年間です。准看護科は主に午後からの登校でした。午前中は所属病院で働き午後から授業を受けるというシステムでした。美味しい昼食を食べてからの受講、当然授業風景という居眠りをする生徒も多々見受けられました。故猪原校長の「個人衛生」の講義中に睡魔にこらえきれなくなったのか？居眠りをする生徒に、ここは起きて聴いて欲しいという思いからか教壇に氷の入ったコップがあり、その中の氷を居眠りしていた生徒の前すぐにあてられた「愛のむち」のエピソードなどもありました。そのような環境の中で学び、准看護師資格試験は全員合格という実績を残しております。その陰には、教員の補習講義も重要な役割を果たしていました。

また、看護師の歴史を遡ると甲種・乙種という看護職から看護婦・准看護婦の名称に変わり、そんな中、准看護婦廃止という働きかけもありましたが地域医療の看護を担うという立場から必要不可欠な人材である事から存続してきました。

入学して6ヶ月過ぎると戴帽式があります。燭台に蝋燭を立てナイチンゲール像にともっている灯から一人ずつ蝋燭に点灯して行きます。全員が点灯し終わって席に戻りナイチンゲール誓詞を唱和します。その一節「我は心より医師を助け我が手に託された人々のために身をささげん」とあります。とても心にひびく詩だと感じます。戴帽生がどのような気持で戴帽式に臨んでいるか？感想文の中に「蝋燭」の灯は小さな灯である。その灯をともして病める人を手と目でしっかり観察できる様にこれからはしっかり学んでいきたいと記してありました。一人の生徒の胸に秘めている思いを知り、その人の心に添った看護をしてけると嬉しく思った記憶があります。

多くの卒業生が地域の看護介護にたずさわっています。学校での学びから社会（職場）でゆっくり、一歩ずつ小さな積み重ねを経験する事により、人間として深みも増していくと思います。人の命にたずさわる職業です。これからもやさしく、誠実で責任感のある看護師の養成に期待しています。





教員時代を振りかえって

元准看護科教務主任 三浦 ヒロエ
(2006年～2008年)

私が看護学校の職員になったのは約47年も前になります。准看護学生だった頃の恩師、桑田先生からの誘いを受け、准看護科27期生の入学直前に採用となりました。当時医療現場で働こうと待機していたのですが考える暇もなく二日後には入学式、担任はC組でした。その頃は3クラスあり、多くの生徒が学んでいました。先輩の先生方に指導を受けてクラス担任が行う仕事、授業の仕方など学んでいきました。この頃、医師会館は紅葉町にあり3階4階5階の一部を看護学校が使用し、生徒は3クラス150人ぐらい一緒に3階の階段教室で学んでいました。

外部講師の時は3クラスと一緒に授業を受け、クラス担任が授業を行う時は1クラスずつ行うこともありましたが、私だけかも分かりませんが最初行うクラスは思ったようにいかず時間も足らず、反省することも多々ありました。次に行うクラスは割とスムーズにでき、最後のクラスの時は時間が余るというような状況でした。3クラス一緒の時は生徒全員に目が向けられず眠っている人もいた様に思います。授業は板書を多く、私は字が汚く大きく書くのですぐに一杯になり消すことも多くありました。チョークの粉が前の生徒にはよく振りかかり嫌がっていましたが、何年か経って白板になった時はスムーズに書け、粉も舞い散らないので嬉しく思ったのを覚えています。看護技術の授業で注射を教えた時、アルコール綿の使い方を清潔を重視して一度使用した部分を使わないように伝えたら、一回拭くごとに新しいアルコール綿を使うと理解した生徒がおり、所属病院から「一回拭いたら、すぐに捨てて新しいのを使って困る」と注意を受けたことがありました。教えることは自分で分かっている、相手に理解してもらうのは難しいことだと思いました。

行事は運動会、修学旅行、遠足、学校祭など色々ありました。修学旅行では富山の黒四ダム、北海道、沖縄、東京など色々な所に行きました。生徒は授業とは違う環境で楽しく生き生きと参加していた様に思います。行事に参加するために計画を立てたり、練習したりと頑張っていました。看護職となり仲間と何かを作り上げたり協力したりと役立つことが多くあったと思います。

臨地実習では、事前学習も多く、朝も早い上、行き慣れない実習病院も多く、短期間で様々な場所へ行かなくてはならず大変だったと思います。受け持った患者さんのお世話をする為の知識は浅く、技術は未熟でも一生懸命な姿は、患者さんにも伝わったと思います。受け持ちを終了する時は涙ながらにお礼を言われた時もありました。

入学生の背景は色々で中学卒業ですぐに入学する人、小さい子供を親に預けて病院に住み込んで資格を取る人などがいました（以前は病院の所属を必ず持つことが入学の条件の一つでした）。寂しい思いをして一生懸命に学んでいた様に思います。資格を取る学習をすることは大変ですが、一生懸命に向き合った最後に良い結果を残したと思います。資格試験が近づくと教員も勉強し生徒と一緒に励まし合いながら頑張っていたと思います。高い合格率が維持できているのもよく努力した結果だと思います。

准看護科がなくなるのは残念です。社会人が学ぶ機会が少なくなってしまうのではと思ってしまいます。これから看護職に求められることは多くあると思います。色々な背景の人と学ぶことは社会経験の少ない人にもいい経験になると思います。学びやすい看護学校で多くの立派な看護師が、社会に貢献できるようにしてほしいです。



准看護科での思い出

元准看護科教務主任 児島 敏恵
(2008年～2018年)

入職して故校長の猪原修三先生から「看護教員は、やりがいのある仕事です。頑張ってください」と言われ看護教育に携わり40数年が経ち数多くの思い出があります。あらためて准看護科での思い出を振り返ってみますと一番印象に残っているのは、その当時の生徒も、背景は多様化しており幅広い年齢層で、社会人として様々な職種で活躍していた人も「看護」を学びたいと目的意識をもち入学していました。58歳の入学生は「人生これから、社会に貢献します」と話し入学後は、とても熱心に学習に取り組み卒業後は准看護師として長年、地域に貢献し活躍されていた事を思い出しました。

生徒は、所属病医院に住み込みながら半日は学校にて専門的知識を修得し学業、仕事の両立、限られた時間を大切に何事にも真面目に一生懸命取り組み、全員が准看護師資格試験に合格した時の感動は今でも忘れることができません。故猪原先生の言われた、やりがいのある仕事の第1号でした。その生徒達が社会に出てどの様に活躍をするのか心がおどったものです。

入職してすぐに1年生の担任になり定員150名を3人の担任で学年の運営がなされていました。看護の講義を各クラスに3回教授する中、はじめのクラスはとても緊張し3回講義することが大変だったなと思い出されます。150名の生徒の名前を覚えることから始まり生徒指導を行うと様々な背景を改めて知り、その生徒が前向きに学習に取り組める為には、どのような指導が必要か先輩の教員から助言を受けながら、生徒に責任をもって関わることを学びました。その為には、教員としても人間性を磨き生徒が育つと共に教員としても少しずつ成長できるように一生懸命、日々取り組んだように思います。

現在は、臨地実習開始前に指導者会議を開催しよりよい教育が実施できるように臨床と連携をとっていますが、当時は、臨床指導者の方は、どのように指導していいのかわからず、ついつい高度な内容を生徒に質問される状況がありました。准看護科の教育内容を理解していただけるように臨床指導者の方と調整し連携を図った思い出があります。

准看護科、第二看護学科の教員として経験を積み重ね、令和6年4月から再び准看護科の実習指導に携わる事となりました。臨地実習は看護教育に於いて重要な授業であり教員は、実習指導者によりよい学習環境を整え学習効果が上がるよう調整することが重要です。生徒は、日常生活の援助のなかでどんな援助が必要か考え指導者さんに報告し指導、助言を受け新たな知識の発見に目を輝かせ「患者さんによりよい看護を提供したい」と日々の学びを活かし学習する姿勢に変化がみられました。教員として臨地の場で、生徒と共に看護に対する思いを新たに教えることを通して自分自身も成長する機会となりました。

実習施設にて当校の卒業生に出会うことが多々あります。専門職業人として自信をもって患者さんによりよい看護を提供されている姿を見ることができ私は「人を育てること、看護教育のやりがい」を実感し看護教育に携わらせて頂けたことに感謝で一杯です。

73年間の長い歴史をもつ准看護科が閉科することは、とても寂しく感じますが、卒業生の皆さんがこれからも地域で益々活躍され社会貢献されることを願っています。



准看護師教育 20 年ぶりの カリキュラム改正を受けて

准看護師科教務主任 濱田 満美
(2018 年～現在)

約 20 年前、第二看護学科を卒業し臨床で看護師をしていた時、恩師の児島先生から教員へのお誘いを受け、看護教育に興味をもっていたことから、平成 17 年（2005 年）に専任教員として就職し、第二看護学科・准看護師科・第一看護学科の 3 つの課程の教育を経験させていただきました。未熟ながら平成 30 年（2018 年）から現在まで准看護師科教務主任として諸先輩方のご指導を賜りながら課程運営を行ってまいりました。

7 年間様々な出来事が起こる中でも、大きな出来事として 2 つのことがありました。

1 つは平成 14 年度から改正の無かった准看護師教育のカリキュラム改正が 2019 年に検討会報告書として方針が出され、国から令和 4 年 4 月（2022 年）施行と発表されました。今回の改正では准看護師養成所における教育の標準化を図るために「准看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標」が明確に出され、急性期看護は求められていませんでした。これを受け、准看護師科の全教員でカリキュラムツリーを作成し、旧カリキュラムの現状と課題を抽出し、その過程で育てたい准看護師像に向けて、目指すべき教育の方向性を確認できたように思います。新たに教育理念・目的・教育目標を検討する中で、福山市医師会の看護師養成事業への考えは現在にも通じる内容であることも再認識でき、地域に質の高い准看護師を育成し輩出することの重責を強く認識したことを思い出します。また、あらゆる場の看護を担う能力を培うための実習施設として新たに地域の施設等をお願いし実習受け入れを承諾頂きました。その後、すぐに課程再編の方針が決定となり、2 年間だけの臨地実習となっても快く実習を引き受けてくださった施設の皆様に感謝の気持ちで一杯です。

県への申請までの間、令和 2 年（2020 年）新型コロナウイルスによる感染症が猛威を振るい、福山市医師会は地域の医療崩壊を防ぐため、様々な事業（PCR 検体採取、ワクチン接種、自宅療養者への健康観察連絡など）を立ち上げ、職員が一丸となってこれに取り組みました。と同時に学校では緊急事態宣言を受け時間割変更、リモート授業、臨地実習の学内への移行など今まで体験したことのない多重課題を皆で協力して乗り越えた怒涛の 3 年間でもありました。

小島副校長の指導の下、新カリキュラムでの課程運営を実践し教育を受けている生徒への学習の保障はできているか、地域のあらゆる場への実習を取り入れたことは生徒達にどのような力をつけることに繋がっているのか、不安と期待が入り混じりました。しかし指導者の熱心な指導を受け、地域の中で生活している人達の実際を目の当たりにした生徒達は新鮮な気持ちで沢山のことを感じ、学習を深めていました。

准看護師科の閉科に伴い、休学者や留年者への影響や未履修科目をいかに出さないように学習を保障し支援していくか、常に考えて対応していきました。卒業を迎えた生徒達の成長した姿に勇気をもらい、准看護師資格試験全員合格に全教員で喜び、やりがいを実感いたしました。卒業生が准看護師・看護師としてこの地域に貢献できる人財となってくれることを心から祈っています。

本年度、高等課程准看護師科は閉科となりますが、この 20 年間で学び得た教育経験を活かし、どんな時も学生とともに看護について考え、語り、目の前の対象者に寄り添った相手の立場に立った看護を提供できる人財の育成に寄与していきたいと考えています。



移り行く時代に逆らうことなく

医療法人 紅萌会 ビーブル春秋苑
施設長 桑原 倅利

この度は、福山市医師会看護専門学校 准看護科閉科に際し、地域医療を支え、介護、福祉の発展に貢献されてこられたことに心より感謝申し上げます。私達研修受け入れ機関は、貴校の生徒達と共に過ごした時間を大変貴重なものと感じております。准看護科の生徒達は熱心に学び実践的なスキルを身につける為に努力を重ねてきました。彼、彼女達の真摯な姿勢や向上心は、私達にとっても大きな刺激となり、共に成長する機会を与えてくれました。特に、実習を通じて生徒達が入所者様に寄り添う姿は微笑ましくもあり私たちの誇りでもあります。また、貴校の教職員の皆様には生徒達への教育に対する熱意と献身に深く感謝申し上げます。貴校の指導の下、生徒達は看護の基礎をしっかりと学び、実践力を高める事ができました。そして、生徒達が自信をもって現場に臨む事ができたのも、教職員の皆様のご指導があったからこそです。閉科に至ったことは誠に残念ではありますが、これからも地域に根差し福山の医療、福祉の担い手の学び舎としてともどもに発展をしてゆけたらと思います。

最後になりますが、准看護科に関わる皆様に心から感謝を申し上げるとともに、今後の皆様のご活躍をお祈りいたします。私達も引き続き移り行く時代に逆らうことなく看護の未来を担う人材の育成に努めてまいります。



准看護科実習を支えた教員の皆様の熱意

公立学校共済組合 中国中央病院
看護部長 喜多村 道代

歴史ある福山市医師会看護専門学校准看護科の閉科にあたり、長きにわたり支えてこられた福山市医師会の皆様、学校関係者の皆様、教員の皆様、そして卒業生の皆様のご功績とご活躍に対し心より敬意を表します。少子超高齢化社会と多様なニーズの中で看護の役割は大きく拡大し、看護基礎教育は4年制大学での教育が主流となっています。国内の准看護師養成所が減少する中、当院で准看護科の実習を受け入れることができたのは、教員の皆様の熱意ある指導があったからこそだと思います。患者指導を見学中に居眠りをしている勤労学生にそっと声をかけ指導者に謝罪しながらも学生の背景を熱心にお話する姿、少ない症例の中でもなんとか実習経験を積ませようと調整に駆け回る姿、自らが看護モデルとなり患者に寄り添う姿、そんな教員の皆様の変わらぬ熱意があったからこそ、臨床の場も一緒に看護職を育成していくのだという意識につながっていたと感じています。

当院は実習指導者研修会を受講した実習指導者を定期的に育成し、実習受け入れ体制を整えて参りました。実習指導者会議では有意義な意見交換、情報交換につながっています。3年後まで存続する第二看護学科、その後は第一看護学科の実習も継続して受け入れていく予定です。今後もこの地域で生まれ、看護教育を受けた学生たちが地域の医療・看護を支える人財として活躍することを心より祈念しております。



記念誌に寄せて

医療法人絃友会 福山友愛病院
看護部長 升原 伸行

この度、この記念誌の投稿にあたり福山市医師会看護専門学校の歴史を振り返ると、助産師の育成から始まり、戦中戦後を経てなお多くの看護師を輩出する、とても長く素晴らしい功績だということを改めて実感しました。そして斯く言う私もこの学び舎で准看護師免許取得のため、日々通学したものです。1 学年 150 人定員で 3 クラスあり、そのうち男子生徒は 1 割程度だったと思います。今では男性の看護師も珍しくなく、むしろ増加傾向にあると感じています。

こうして今、学生生活を思い出してみると、走馬灯のように次々と思い起こされます。

中でも心に深く残っているのは、戴帽式に向けてナイチンゲール誓詞を繰り返し懸命に暗記したのは良い思い出です。また臨地実習では辛い時もありましたが、グループで助け合うことで、長い実習期間を乗り越えることが出来ました。学校では勉強や実習ばかりではなく、親睦を深めるための交流行事もありました。みろくの里の合宿や沖縄旅行、スポーツ祭など... 楽しい思い出です。

あの頃の准看護科は、まだ精神科実習がありませんでしたが、何時しか精神科実習が追加されていました。当院においても臨地実習を受けており、実習生が来ることで指導者はもちろん、スタッフにも良い刺激になっていると感じています。准看護科が閉科になることはとても残念な限りですが、今後の全日制看護学科の益々のご発展をお祈り申し上げます。



実習生とともに成長できた現場

医療法人辰川会 山陽病院
看護部長 藤井 美江

この度、准看護科閉科にあたり実習生の受け入れ病院として一言ご挨拶申し上げます。

当院には働きながら福山市医師会看護専門学校の准看護科で学び、その後第二看護学科を卒業し活躍している看護師が 3 分の 1 程度在籍しており、今では管理職として活躍している人もいます。中堅看護師数が安定し始めた平成 21 (2009) 年度から成人・老年看護実習施設として、実習生を受け入れることになりました。指導者となる看護師は事前に研修に参加し、現場で看護を教えることができる人材になれるよう努力してきました。実習中は、かつての恩師でもある先生が引率教員として長年付き添われており、成長した姿を見てもらえる嬉しさ、照れも感じながら笑顔で意見交換している姿を微笑ましく思いました。実習生を受け入れ次世代の看護職の育成に携わることは、自分の看護観を再認識することにもなり、自己成長にも繋がります。15 年間実習病院としての責務を果たせたことは、当院にも大きな成果がもたらされました。

近年では社会人経験を経てからの実習生を多く目にするようになりました。違う分野から看護分野に携わろうとしている姿は、頼もしく応援したい気持ちでいっぱいでした。しかし時代に求められている看護職への期待を考えると、致し方ないという思いです。准看護科の実習受け入れは終了しますが、今後も学校との顔の見える関係性を大切にしたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。



福山市医師会看護専門学校高等課程の 実習生からの学び

特定医療法人社団宏仁会 寺岡整形外科病院
参与・人事部長 山下 文子

福山は街の中心部に初代藩主水野勝成によって築かれた福山城が、江戸の昔から今日まで藩のシンボルであり続けています。

この地が福山町と言われていた1908年の頃、有志の医師たちにより私立の福山産婆・看護婦養成所が設置されました。以来、長い歴史の中で看護教育一筋、社会に貢献できる看護師の育成を目的に歩んでいる学校です。当院は、2015年から高等課程の実習生を受け入れ、300名近い生徒との出会いがあります。当初より実習受け入れを担当した看護部長として閉科に当たり想いを綴ります。

福山市における看護師養成事業は創立以来、その時代の流れに即応した看護教育の変遷をたどり2020年現在、准看護師5,982人を含む8,502人の卒業生が地域の保健・医療・福祉施設で活躍しています。

臨地実習の目的・目標は、看護実践に必要な基礎知識・技術・態度を取得すること、看護者としての人間性を養い、自己成長できる基盤を身につけることにあります。なにから教え、どのように指導したら良いのか？不安な思いのまま実習初日を迎えました。

2年生後半の実習となる彼女たちからは私が想っていた不安は感じられず、何故かしら堂々とし、やる気満々の6名を見て安堵した私でした。実習病棟では腰を落として、患者に視線を合わせ、ゆっくりとした口調で情報収集している彼女たちの姿を見たとき、忘れかけている遠い昔の自身の姿が思い出されました。当院の看護部理念は、患者の人権を尊重し、信頼され、愛ある看護を提供することです。顔いっぱいの笑顔で患者に寄り添い、原理・原則に沿ったケアを実践する実習生。日々忙しく慌ただしい医療現場の中で、昔を振り返ることができ何かしら晴れやかな気持ちになり、笑みを取り戻せた朝の1コマでした。

令和7年3月を以て高等課程准看護科の教育は終わります。院内から実習生の姿が無くなることは寂しいことですが、今後の福山市医師会看護専門学校の看護師教育の充実と人材育成を心よりご祈念申し上げます。





准看護科との歩み

福山循環器病院
看護部長 萩原 敏恵

この度、福山市医師会看護専門学校沿革を拝見しました。地域の医療や介護を支える看護師・准看護師を地域に送り続けられ、当院にも卒業生が勤務しております。

当院は、講師派遣や臨地実習受け入れなどで看護学生教育に携わることができました。平成26年度から受け入れ開始し、「とにかく一緒に行動して話す」から始まりました。どのような看護援助をするのか具体的に計画すること、毎日の実践の振り返りをすることを課題として、看護の楽しさに気づき学べるように指導者と教員でよく話し合っていました。また、指導者が落ち着いて生徒を見れる環境にできたことで、「初心に戻って看護が楽しい」と言い、学生指導が看護観や倫理観育成につながりました。

看護学生になることが専門的な看護実践のスタートであり、学生時代の出来事には忘れられない思い出があると思います。人と人のコミュニケーションから始まる看護の基本に戻り、失敗から謙虚に学ぶ実習ができたことを大変嬉しく思います。

最後に、看護補助者の生徒が無断欠席や遅刻すると病院へ連絡があり、保護者のように話をしたことがあります。諸先生方のご苦勞をお察しした出来事ですが、今では笑い話です。大変お世話になり、ありがとうございました。准看護科に関わられた皆様と卒業生の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。



看護学生として学び、育てる側になること

特定医療法人財団竹政会 セントラル病院
看護部長 奥永 恵美

看護師養成の情勢に伴い、准看護科の閉科の話をお聞きし、残念な気持ちと准看護師養成に尽力された先生方、医師会関係者の方々へ感謝の意を表したいと思います。

私自身も看護学校が現在の場所に新築移転した平成2年に医療高等課程（准看護科）へ入学し、その後医療専門課程へ進学し、看護師免許を取得して、福山市内で地域医療を担う一員として歩んできました。その当時の看護学生は、通常の病院勤務と学業両立が当たり前の時代でした。同じ境遇の仲間とは、いつも笑いがあり、学校行事は楽しむ、病院実習はみんなで乗り切る、資格試験は全員合格をするという同じ目標に向かっていました。これは、先輩方や熱意のある先生方の教えが浸透し、自然に看護学校全体の校風に繋がっていたと思います。

また所属施設として、准看護科の実習病院の機会を頂いた事にも感謝をしています。指導者達は、看護学生を教える事で、日々、看護学生の成長を実感しながら、自身の看護観も振り返り、新たな学びに繋がっています。これからの看護師は、病院施設だけでなく、地域のあらゆる場所で役割を期待される職業です。今後も地域の医療機関として、福山市医師会看護専門学校と連携をとりながら、よい看護人材を育成するための学びがいある実習環境を提供していきたいと思っています。



振り返って「食生活と栄養」

非常勤講師 藤田 幸子

食事が深い関係をもつ生活習慣病を中心に医療における治療食の重要性はより高まり、関係職種の人達にもその必要性が周知されてきました。特に患者に身近な看護師にとって、栄養学を理解しておくことは極めて不可欠なこととなりました。

現校舎に移転し当時は調理実習もできました。治療食の調理、味、量を体感しました。各班のあちこちで驚きの声が聞こえ、教室で見られなかった笑顔や個性も見られました。

学校祭では、カレーとおでんの大量調理に奮闘しました。食中毒等の食の安全性を学び乍ら皆で知恵を絞り合いより美味しいものを目指し、心一つに学校祭を盛り上げました。

国民の全てが苦しみ戦った新型コロナウイルス感染症警戒期には、リモートでの授業でした。事態が収束し全員が無事教室に戻って来、対面授業を行ったときは、1人1人の顔をしみじみと眺め安堵したのを記憶しています。平常の授業を進めていくうちに、質問や相談が多くなり一途に知りたい、学びたいという姿勢が頼もしくうれしくも感じたものでした。

30数年の務めを振り返り、巣立っていった生徒たちが、社会で自分の居場所を見つけ、蓄えた自らの力を発揮できることを祈念して止みません。学びの場で御尽力された関係皆様の奮励努力は、広く臨床現場で花を咲かせ求められる医療人になると固く信じています。



福山市医師会看護専門学校の未来・発展

非常勤講師 檀上 宗謙

福山市医師会看護専門学校准看護科閉科にあたり、この73年間、看護の道を支え続けてきた学校関係者、卒業生の皆様に、深い感謝の意を表します。皆様の献身的な努力が、数多くの命を支え、人々に寄り添う看護師を育ててきました。

特に、私は生命倫理や緩和ケアに携わる授業を23年間担当してまいりました。この時間の中で、生徒の皆さんが患者様一人ひとりの尊厳を大切に、最も困難な時にも寄り添い続ける看護の姿勢を身に付けてくれることに、深い感銘を受けています。

未来への希望として、福山市医師会看護専門学校がこれからも、医療現場における人間らしさや思いやりを大切にした教育を続け、次世代の看護師たちがさらに輝かしい道を歩んでいけるよう心から願っております。この73年の歴史が、次の100年、さらなる成長の礎となることを信じています。



「感染と予防」の授業を振り返って

非常勤講師 三輪 泰彦

私は 2004（平成 16）年から 2023（令和 5）年の期間、「感染と予防」の非常勤講師を勤めさせていただきました。授業を行う上で、生徒には知識だけでなく自ら考え行動できる看護師になってもらえるよう心掛けました。授業当初、目に見えない病原微生物の細菌やウィルス、免疫では液性免疫と細胞性免疫の違い、抗生物質の作用など、まったくイメージができず戸惑う生徒が多かったことが思い出されます。一方で、授業中、睡魔との戦いに打ち勝って真剣にかつ熱心に授業に取り組む生徒が増えてきた印象をもち、とてもやりがいを感じました。さらに休憩時間に納得できるまで積極的に質問する生徒も見られ、このような生徒の態度に私自身、刺激を受け、非常に貴重な経験をさせていただきました。授業を担当した期間には、新型インフルエンザ等感染症、鳥インフルエンザ、新型コロナウイルス感染症など様々な感染症が流行し、特に新型コロナウイルス感染症は世界的な流行に至り、国内でも国民の生命および健康に重大な影響を及ぼしました。2 類相当の期間、医療機関・高齢者施設等の感染対策として感染経路や滅菌・消毒、治療法（ワクチン）を学ぶ必要性ができました。私自身、看護学校で教える中であらためて「感染と予防」の意義や重要性を認識し、学ぶことができました。福山市医師会看護専門学校の方々に感謝しています。准看護科閉科にあたり、福山医師会看護専門学校准看護科の教職員および卒業生の皆様の今後のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。



准看護科の閉科に寄せて

非常勤講師 濱岡 敬

福山市医師会看護専門学校准看護科の閉科に際して、2018 年度より看護師教育の現場で多くの生徒たちに薬理学の講義をおこなってきた時間と、生徒たちの情熱と努力に触れて私自身刺激を受けた日々を振り返ると、感慨深いものがあります。これまで看護専門学校は、医療の一翼を担う看護師・准看護師を養成する重要な役割を果たしてこられました。そのようななか、准看護科は生徒の年齢層が幅広いため、私はいかにわかりやすい講義をおこなうかということに心を砕きました。授業に臨む生徒たちの真摯な姿勢や看護に対する情熱に触れるたびに、私自身も多くのことを学び、講師として 6 年間生徒たちの成長を見続けられたことは、私にとってかけがえのない財産となりました。生徒たちは、厳しい学びの中で技術と知識を身につけ、患者さんやそのご家族に寄り添う心を育んできたことと思います。その姿勢は卒業後も変わらず、多くの卒業生が現場で活躍し続けています。閉科という決断は、関係者全員にとって非常に寂しくつらいものです。しかし、看護専門学校で培われた知識と経験は、これからもさまざまな現場で生かされ続けることでしょう。卒業生たちが、看護の精神を胸に、それぞれの現場で力を尽くし、輝き続けることを心から願っています。最後になりましたが、長い間生徒たちのお世話をされた学校関係者の皆様に対して感謝申し上げるとともに、福山市医師会看護専門学校の今後のさらなる発展と皆様方のご健勝とご活躍を祈念いたします。



准看護学校の思い出

卒業生 第26期生

井上 トヨ子・平川 ひとみ

私達26期生は、1977年（S52年）に入学しました。

入学生は男性4人、女性117人で2クラスあり、あの頃は紅葉町に医師会館がありました。

卒業生は男性4人、女性90人です。

入学生は全員各病院に入寮し、病院で助手として勤務しながら半日看護学校に通っていました。日勤、夜勤、救急の仕事をする中で経験を積み准看護師を目指していました。

学校で、解剖生理、看護技術など学び、内容も読み方も難しく分かりづらかった。

実習はシーツ交換、バイタルチェックなどがあり、シーツ交換は特に指導が厳しかった。

2年生では、福山市民病院で看護実習をしました。皆、実習場所まで自転車で通っていました。実習で、患者との接し方、実技を通して看護の大切さと大変さを学びました。

初めてのナースキャップを頭に付けてもらい、キャンドルの明かりの中でナイチンゲール誓詞を皆で斉唱した戴帽式、とても感動的でした。修学旅行は3泊4日で信州、能登半島方面に行きました。看護学習発表会、卒業式、謝恩会と沢山の思い出があります。

現在、医療従事者不足の中、准看護科の閉科により、ますます看護師不足になる不安を感じます。これから先、少しでも多くの看護師が誕生することを願っています。



世代を超えた情熱

卒業生 第31期生 前場 幸登

私は、この福山市医師会の看護学校で看護教育を受けた。高卒で入学し、准看護科、第二看護学科で学び看護師免許を取得させていただいた。

学生時代は困難なこともたくさんあったが、常に熱心に指導を受けたことをリアルに覚えている。

准看護科が開校した70有余年前、当時は戦後で復興の時期。物資など裕福な現在から考えれば、想像がつかないほど苦難な時代だっただろう。そんな中、時代を乗り越えられたのは、諸先輩方の看護に対する情熱があったからではないか。

時代は変わっても、その溢れる情熱は変わらない。それは福山市医師会看護専門学校の魅力となり、世代を超え引き継がれてゆく。

全国的に看護師の人員、人材不足の現状があり、医療機関は人材確保に大きな力を費やしている。諸先輩方の情熱を肌で感じながら、今以上にこの福山地域に貢献できる看護師が養成されるよう期待したい。



准看護科で学んだ思い出 学び舎に感謝!!

卒業生 第 39 期生 長谷川 理香

この度高等課程准看護科の閉科を伺い、当時のことを懐かしみ、思いを綴らせて頂きます。私たちは平成 2 年度の入学生で（3 クラス約 120 名）、生徒の 9 割が高卒者と若く活気があり、新校舎での学びが始まりました。生徒の多くは所属医療機関で寮生活をし、半日は病院で勤務しながら学びました。医師会の先生方から疾患についてご講義いただき、教員の方から基礎看護技術を学び、所属病院での現場実践や様々な臨床経験を元に学生時代を乗り越えました。

現在、共に学んだ同期は 50 歳代に突入しましたが、病院やクリニック、保育所、介護施設など様々な場所で活躍しています。福山市医師会看護専門学校での学びがあってこそその看護師人生であると、私自身大変感謝しております。

時代の変遷に伴い、准看護科が閉科されるのは誠に残念ですが、これからも福山市医師会看護専門学校が地域医療を支える優れた看護師の育成に尽力されますことを、心よりお祈り申し上げます。



准看護科の歩みと未来への期待

卒業生 第 42 期生 高江 肇

准看護科 73 年の歴史の一端を担えたことに誇りを感じております。時代の流れに伴い、准看護科が閉科されることに寂しさを覚えますが、その思い出は私の心に深く刻まれています。

私がこの学校に入学した平成 5 年、沖縄では精神科看護師が不足しており、看護学校も限られていました。県医師会や精神科病院協会の支援で、奨学金制度を利用しこの場に辿り着いたことが、私の看護師としての原点です。私が印象に残っているのは、平成 6 年実習の為に分娩室に立ち会い、男の子が生まれたこと、その子は現在 30 歳になります。実習を重ねた日々は今も鮮明に思い出され、共に支え合った仲間が存在が私を成長させました。

准看護科で培った知識と技術は、私のキャリアの礎となり、今も地元沖縄で活躍する原動力です。未来の教育課程の再編後の看護学校におきましては、さらなる教育の充実と医療・介護分野に貢献する人材の養成を期待しております。新たな世代の看護師が、愛と専門性をもって地域に寄り添う姿を楽しみにしています。



福山の灯

卒業生 第57期生 中川 悠

明治41年、福山の地に私立福山産婆看護婦養成所が開設され116年の月日が流れました。時代と共に姿を変え、沢山の看護職員を育成し社会へ輩出しましたが、准看護科は令和7年3月に惜しまれつつ閉科を迎えます。

私は社会人を経て24歳で本科へ入学しました。半日勤務・半日学校という慣れない環境の中で、挫折しそうな事が数多くありました。しかし、様々な世代・境遇の仲間と苦楽を共にしながら勉学に励みました。教職員の先生方は常に優しく見守って下さり、時には叱咤激励を受けることもありました。そのおかげで困難を乗り越え、成長することができました。そして本科があったからこそ、社会人から一念発起して看護師を目指すことができ、現在まで看護師として幸せな人生を歩むことが出来ました。

私は本校の准看護科で学べたことを心から誇りに思っています。閉科はやはり寂しいですが、今後も素晴らしい看護者を輩出し、地域医療を支える「福山の灯」であり続けて欲しいと思います。



天職を得る

卒業生 第60期生 細川 康宏

この度准看護科の閉科の報に接し、寂しさと残念さ、そして何より感謝の念に堪えません。私は本校の学びの中で「老年看護」と巡り会うことができました。これぞ天職と思え古希を迎える本年も特養の現役看護師としてやりがいのある充実した毎日を送っております。

准看護科、第二看護学科は設立以来現在までの長きにわたり医療、介護分野に多くの優れた人材を送り出されてきました。この実績の根本を支えたのは准看護科の看護師としての知識や技術の修得はもちろんのこと、「豊かな人間性の教育」にこそあったと確信しています。准看護科の素晴らしい歴史と伝統は消えることなく、「3年課程」へと引き継がれて行きます。今後の益々の御発展を祈念しております。

最後になりましたが、70有余年にわたり准看護科を支え、看護師を志す者を慈しみ育てていただきました医療機関、介護、福祉関係の皆様方、福山市医師会、看護学校の先生方、全ての関係者の皆様方に心より感謝し、深く厚く御礼申し上げます。

感謝



准看護学科での歩みを振り返って

卒業生 第68期生 行里 貴子

私は介護老人福祉施設に介護職員として入職しました。入職前はおしもの世話などに抵抗があるかと思いましたがそのようなことはなく、おむつ交換や食事介助、移乗など様々なお世話をさせてもらうことに感謝し、自分の経験値が増えることに喜びがありました。そして、3年経過し介護福祉士国家試験を受け資格を取得することができました。しかし、その3年間のうち介護職ではできない吸引などの医療行為ができないことで気分が落ち込むことがあり、看護師になり知識・技術を身につけもっと人を助けたいと思い、福山市医師会看護専門学校准看護科に入学しました。

准看護科の先生はとても厳しくびくびくする毎日でしたが、私たちの気持ちが緩むことがなく、人の命を預かることの責任感をもてる看護師になれるように指導してくださる愛のある厳しさなのだ日に日にわかってきました。学生生活は半日学校・半日仕事であり、車での移動時間は1日約2.3時間かかりました。授業は身体の仕組み、健康および病気に関する観察力・判断力を高めるための勉強などありテストの日々でした。臨地実習は厳しく弱気になったこともありましたが、先生や仲間に話を聞いてもらい気分を入れ替えて実習に臨んだことを覚えています。私は母親でもあり、子供の学校行事・クラブ活動ではほぼ毎週末の県外遠征への送迎や試合の応援もあり2年間目まぐるしい日々を送りましたが、無事に卒業でき資格を取得できました。看護師になれたのは、教職員の皆様、クラスメイト、職場の方々、子どもたち、実家の家族に支えてもらえたからであり、改めて感謝いたします。



本校教員となった卒業生たち



出会いにありがとう

卒業生 第27期生 高橋 晴子

私は、受験に惨敗して高校の副担任に福山市医師会看護専門学校を勧められ准看護科を経て看護師の資格を取得し臨床で看護師として働きました。平成19年4月から准看護科の実習担当教員として、閉科まで関わらせて頂きました。「不思議な縁」と実習を通して、患者様・生徒との日々の関わり振り返ることで「今日までで何が出来たのかな？何を残せたのかな？」と思いましたが、看護師としての役割・原点を思い出させて頂きました。患者様のために何が出来るか生徒と一緒に参考書を開き、考え共に実施できたことは、苦労もありましたが楽しく、私が学ばせて頂きました。また臨床の場で尊重を教わりました。初めての実習場所で「生徒各々に名札を作って頂き生徒さんでなく名前呼びます」という対応を受け生徒は、未来の私達の仲間として大切な存在という思いが伝わり、共に「実習頑張ろう！」という気持ちになりました。私にとって大変さもありましたが、価値のある時を過ごせたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

最近では、臨床の場に私と関わった卒業生を見かけたり、声をかけてもらったり、成長を感じることをうれしく思います。これからも共に励まし合いながら学び続け、卒業生の皆様が各地で活躍されることを期待します。

准看護師教育に携わり、今思うこと

卒業生 第38期生 富永 栄子

20年ほど前のある講演で「これからの日本の医療は、超高齢化社会において、超急性期を担う病院と地域・在宅の二極化に分かれ、看護の需要もそのどちらかに分かれていくだろう」という話を聞き、急性期病院で勤務していた私は、気が引き締まる思いでその言葉を受け止めながら自己研鑽していました。

教育の場に身を置くことになった今、その言葉は、看護師を育てていく柱となっています。特に准看護師は、地域看護の担い手と期待される人材です。地域の場で療養される人々を生活の場から支え、安心してその人らしく生を全うされていく過程を心身共にそばで寄り添いサポートし続けていける人々に育てて欲しいと願いながら、教育のお手伝いをしてきました。

いま、閉科となり一抹のさみしさを覚えますが、諸先輩方から引き継がれた看護の種は、絶やすことなく、どこかで花開いて実を結び、次の世代の地域看護に根を張っていくことと思います。



准看護科の思いで

卒業生 第43期生 服部 寛子

入学のきっかけは、38歳の時看護助手として仕事を始めて間もなく、40代の先輩看護学生から「貴方も学校に行ったらいいのに。楽しいわよ」の一言だった。1992年入学、150人の同級生の内、社会人は1割足らず。学校では、高卒の若者に囲まれて学ぶことの新鮮さとともに覚えることにとても苦労した。当時の科目以外には、運動会や文化祭、修学旅行などの行事もあり楽しい思い出と仲間がたくさんできた。看護師の資格を取得後、多くの経験を重ねたが、10年後看護を学び直したいと考え退職した。1年後、恩師の田口副校長から声がかかり母校を訪れたその日、既に教員として就職が決まっていた。実習指導者として精神科を担当し気づけば15年が過ぎた。

近年の准看護科は、社会人が資格取得のため意欲的に学ぶ生徒が増えている。彼らの切実な現実を知り、どの生徒も資格を取れるよう応援したいと思った。思い出の中の看護学校を振り返って思う時、自分自身も含めて各々の人生の転機になっている。そして人間として成長させて頂いた多くの経験や出逢いが人生を豊かに彩ってくれている。

多くの社会人を受け入れて戴いた学校の存在を改めて感謝するとともに、今後も資格取得を切望している社会人を育成する学校であって欲しいと願っている。



感謝

卒業生 第44期生 佐藤 尚美

私は、この学校を卒業し2021年からは看護教員として学校で過ごさせていただいています。私が学んでいた頃は、病院に所属し働きながら学んでいる学生がほとんどでした。働きながら学ぶ環境はとても大変でしたが、同じ病院に所属している先輩後輩との繋がりも強く、学校生活に不安はありませんでした。当時は、修学旅行にスポーツ大会、学校祭と学校行事も多くありました。しかし、教員として就職したとき、コロナ禍ということもあり、学校行事はもちろん、実習もない、授業はオンラインという、自分が看護学生だった頃とあまりに違う様子に衝撃を受けました。当たり前にも実習ができ、授業を受けていた自分の学生時代を振り返ることができました。今また生徒と一緒に臨地実習をしながら、今の自分があるのは学生時代に多くの人に教えられ、支えていただいたおかげと感謝の思いでいっぱいになります。准看護科は閉科になりますが、卒業生として出来るだけ多くの人に学びを伝えていきたいと思っています。



学校生活を振りかえって

卒業生 第50期生 畑山 香緒里

24年前に、看護師になりたいと決意し福山市医師会看護専門学校へ入学しました。当初の准看護科は制服があり、規律がとても厳しい学校でした。看護師になるためには、こんなにも厳しくないと成れないのだと感じて学習を行っていました。また、9割が所属病院等で働いていました。2年間の中で、仲間との思い出を振り返ってみると修学旅行へ行ったことなど、楽しい思い出が多くあります。私は、高校卒業後でありおしゃれをしたい時期でもありこのくらいは大丈夫と思髪の色を染め学校に行くと、教員から「その髪の色は地毛ですか。私は美容師の知り合いがいるからすぐにわかる」と指導を受けたことを思い出します。看護師として人と接する仕事であるため規律の大切さを学ぶことができ、仲間と励まし合いながら一生懸命に日々の学習に取り組んでいたと思います。

看護師になり院内などの職務に就いたときに学校での厳しさに有難さに気づくことも出来ました。厳しさの中に愛のある指導をいっぱいを受けた学生時代でした。



母校がわたしに残してくれた言葉

卒業生 第52期生 宮崎 裕子

私が准看護科に在学致したのは2003年からの2年間になります。病院で働きながらの学校生活を両立させるためにとにかく必死だったことを思い出します。そんな学校生活の中で印象に残っていることは「看護を支えるのは知識、技術、態度」という先生の言葉です。知識技術はもちろんですがそれを支えるのは態度であり、人として、看護師としてどう在りたいかということを経験に出会ってから考えさせてくれる言葉でした。迷ったとき悩んだとき、知らず知らず鼻が高くなっていたとき…その場面ごとに意味を変え、学びと成長をくれる言葉を残してくれた先生方に心から感謝申し上げます。

准看護科と第二看護学科が順次閉科となりますが、福山地区を支える看護を育む学校として幕を開け、より一層発展していくことを祈念致します。

准看護科の 変遷をたどって



■ 戦後、准看護婦制度の導入とともに

昭和 26 (1951) 年に「保健婦助産婦看護婦法」(昭 23.7.30 法律第 203 号) が改正され、我が国において初めてとなる准看護婦制度が発足した。これと時期を一にして、翌 27 (1952) 年 1 月に県知事から「福山市医師会附属准看護婦養成所」の指定を受け、昭和 29 (1954) 年に学校教育法上の各種学校として認可を受けたのが、福山市医師会における今日の准看護師養成事業の始まりとなった。

爾来、同年 3 月に第 1 期卒業生 40 人を送り出したのを嚆矢として、戦後の復興の歩みとともに、准看護師需要に応えるため、これまでに 6,000 人を超える卒業生を送り出してきた。

■ 高度経済成長期の中で

昭和 31 (1956) 年には医師会館を約 50 坪増築して教室を確保し、翌昭和 32 (1957) 年に定員を 60 人に増やした。続いて、昭和 40 (1965) 年には「福山市医師会附属准看護学院」に改称し、定員を 100 人にまで増やしていった。

また、昭和 44 (1969) 年の医師会館建築の折には 1 年間、福山誠之館高校の旧校舎の一部を間借りして授業を行い、昭和 45 (1970) 年 11 月に紅葉町に医師会館が竣工した。



〈写真：紅葉町の医師会館での授業風景 (1970)〉

■ 専修学校の認可

昭和 52 (1977) 年 9 月に、専修学校として認可となった。

昭和 53 (1978) 年 4 月には、福山市医師会附属准看護学院と福山市医師会高等看護学院 (昭和 48 (1973) 年 4 月開校) を統合し、医療専門課程看護婦科と医療高等課程准看護婦科から成る「福山市医師会看護専門学校」が誕生した。この時、准看護科の定員を 150 人に増やした。

また、以前から、学力不足や適性、経済的な理由などから中途退学者が跡を絶たず、昭和 61 (1986) 年 5 月には中途退学者の対策を講じるため、「看護学校委員会」を設置、翌昭和 62 (1987) 年に入試改革を行い、選考のあり方を検討した。

■ 准看護婦制度存続の運動

平成 7 (1995) 年 9 月、朝日新聞に「“准”看護婦の養成をやめよ」という社説が掲載された。これを受けて福山市医師会では准看護学生の意識調査を行ったところ、87.7% が「廃止すべきではない」という意見だったため、同年 10 月に大田浩右会長が朝日新聞東京本社を直接訪れ反論書を手渡し、抗議をした。

翌平成 8 (1996) 年 12 月には、厚生省の諮問機関「准看護婦問題調査検討会」が、21 世紀の早い時期に看護婦養成制度の統合に努める旨を提言したため、検討会の委員に福山市医師会看護専門学校の准看護学生が反論文を送付した。大田会長も、日本医師会の坪井栄孝会長に准看護婦制度の存続について協力を要請した。

平成 9 (1997) 年 5 月には、福山市医師会看護専門学校生が全国の医師会立准看護婦科生に向けて、准看制度の存続を求める署名運動を働きかけ、大田会長も坪井日本医師会長に「准看制度の存続と改善」を要求した。これを受けて、同年 12 月に日本医師会が「准看護婦制度存続」を声明し、厚生省に反対署名簿を添えて陳情し、准看生も 12 名参加している。

この運動は、准看制度の存続と待遇の改善に効果を発揮したといえることができるだろう。



〈写真：百周年記念誌より / 准看制度存続に向けて署名運動を開始〉

■ 看護師養成の需要の高まりの中で

平成に入ると、国は准看護婦養成のための新カリキュラム等について、准看護婦の資質向上をねらいとして、「保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則」の改正を行い、平成 14 (2002) 年度から施行することとなった。

その内容は、カリキュラムの総時間数を現行の 1,500 時間から 1,890 時間とし、専任教員を現行 2 人から 5 人 (生徒 40 人当たり) とするという内容であった。

こうした状況に鑑み、教員体制の係わりもあり、当時の准看護科の定員 150 人を、改正規則の施行に合わせ定員 80 人に減ずることとした。

一方、専門学校を取り巻く状況は、「看護師等の人材確保の推進に関する法律」(平成 4 年法律第 86 号) が施行されたことを契機として、看護学科を設ける大学が増えるようになり、平成 19 (2007) 年 4 月には、市内にも福山平成大学に看護学科が開設された。

さらに当時は、高校に学校訪問に出かけても、看護職志望の生徒の大半は 3 年課程への看護師養成課程の進学を希望する状況があり、その一方では全国的に少子化が加速するという厳しい状況に直面していた。

こうした状況を受け、福山市医師会でも全日制 3 年課程の新設が議論に上がり、平成 18 (2006) 年 5 月に学校長や担当理事経験者らで構成される「第 1 回全日制看護学校準備委員会」が開かれた。そして、その後も合同委員会や定時総会などで検討が重ねられた結果、准看護科及び看護科 2 年課程 (第二看護学科) の定員を 80 人から 40 人に削減し、全日制の 3 年課程 (第一看護学科) を新設するという方針が打ち出され、平成 20 (2008) 年 9 月の臨時総会で看護学校の改組が議決された。

しかし、その後も、大学志向や少子化の波に歯止めがかからず、准看護師を目指して本校を受験する者の数は減少の一途を辿り、平成 22 (2010) 年当時の受験者数と比べると、その数は 4 分の 1 に満たない状況に至った。

■ 准看護師課程を巡る全国の情勢

こうした状況は、全国の医師会立看護学校養成所においても、その傾向が顕著である。日本医師会は、「医師会立助産師・看護師・准看護師学校養成所調査」を毎年実施しているが、令和 6 年公表された資料 (過去 5 年間の推移比較) によると、看護師 3 年課程の学校数がほぼ横ばいで推移しているのに比べ、准看護師課程や看護師 2 年課程では、学校の約 4 校に 1 校が募集停止をし、閉校 (科) している。

一方、受験者の状況を見ると、この 5 年間、看護師 3 年課程にあっても 4 割強が減少し、看護師 2 年課程が約 5 割弱、准看護科に至っては約 6 割が減少している。

このような受験者数の大きな落ち込みは、各課程の定員充足率に大きな影響を及ぼしており、一様に低下傾向を示し、中でも准看護科の定員充足率は、5 年前の 78.8% から 55.2% とこの 5 年間で 23.6 ポイントと著しく低下し、厳しい状況が続いている。

■ 新たな看護学校を目指して

こうした厳しい状況を背景として、福山市医師会では理事会や看護学校委員会で議論が重ねられ、令和4(2022)年6月、福山市医師会定時総会において、これまでの3課程(第一看護学科、第二看護学科、准看護科)を看護師養成(3年課程)の1課程とする「課程再編計画」を議題として上程した。

議案は、准看護科の受験者数の激減や教員体制の逼迫など現下の厳しい状況を打破し、中長期的な視点に立って、将来に向け持続可能な看護師養成を図っていくための選択として、准看護科と第二看護学科を令和10(2028)年3月までに順次閉科し、現在の第一看護学科の定員を増やし、課程を一本化するという内容であり、大方の賛成を得て承認された。

准看護科は令和7(2025)年3月をもって閉科となるが、福山市医師会は将来に亘って、看護専門学校が充足した教員体制のもとで責任ある看護教育を行い、地域に貢献できる質の高い看護師を今後も地域現場に送り出し続けられるよう、全力を傾注していく。



福山市医師会看護専門学校(現在)

学校の沿革

～准看護科のあゆみ～



- 明治 41 (1908) 年 ●福山町の有志医師たちが、私立福山産婆看護婦養成所創業
- 明治 42 (1909) 年 ●校舎は「義倉」に借りた家屋を使い、1月から授業は開始される
●入学資格や修業年限は不明だが尋常高等小学校卒業程度以上、満14歳以上が入学資格で修業年限1年となる
●明治時代は、看護婦養成所について全国的な統一基準はなく、各県がそれぞれの実情に応じて規定していた
- 大正 2 (1913) 年 ●私立福山看護婦養成所と改称
- 大正 4 (1915) 年 ●福山城の東側「義倉」付近に看護婦養成所の記録がある
●看護婦規則制定。ようやく看護婦に関する全国的な統一基準が出された
- 大正 9 (1920) 年 ●福山市医師会の設立（知事認可）により、福山市医師会附属産婆看護婦養成所（私立を継承）となる
- 昭和 2 (1927) 年 ●東堀端町（現在の城見町2丁目2番）の福山市医師会館へ校舎移転、福山市医師会附属看護婦養成所として看護教育を行う
- 昭和 3 (1928) 年 ●福山市医師会館 竣工



初代医師会館（昭和3年竣工）

- 昭和 6 (1931) 年 ●福山市医師会附属産婆看護婦学校に改められ試験免除の指定看護婦学校になる
●学校の設備が充実し実習病院も確保できたことから指定を受けたものと思われる
●空襲で記録を消失した為、学校の運営や授業などについての詳細は不明だが講師はほぼ9人の体制で運営
- 昭和 16 (1941) 年 ●戦時下における看護婦の需要増に備えるため看護婦規則が改正され免許取得年齢が1歳下げられて17歳以上となる
- 昭和 19 (1944) 年 ●免許取得年齢が1歳下げられて16歳以上になり修業年限の緩和や受験資格の特例を認める措置も実施されている。その当時の資料は残されていないが、学説実習と併せて修業年限2年課程の養成事業を行っていたものと思われる

戦時中は、軍関係の看護婦が多数必要となり、養成期間は短縮され1年で卒業し看護婦試験に合格後は看護婦となる。しかし昭和20年8月の戦災により学校関係の記録や帳簿類は全焼し、当時の定数などは明らかではない。校舎は転々と移ることを余儀なくされた

- 昭和 20 (1945) 年 ●福山大空襲で医師会館も焼失、以後27年3月頃まで会館は誠之館音楽教室、西小学校附属振励館、商工会議所、福山保健所などへ転々とする。卒業証書番号等から推測すると昭和20年3月までに845人以上の卒業生、その内3分1が産婆生、3分の2が看護生だったようだ
- 昭和 22 (1947) 年 ●福山医師会助産看護婦学校に改称
- 昭和 23 (1948) 年 ●「保健婦助産婦看護婦法」制定により福山市医師会附属看護学院に改称
- 昭和 26 (1951) 年 ●「保健婦助産婦看護婦法」の一部改正 看護婦と准看護婦の区分変更により福山市医師会附属准看護婦養成所に改称

福山地域に看護婦や産婆の養成所ができるまで志望者は、岡山や広島の養成所で修業していたようで財団法人「義倉」が修業経費を負担していた記録が残っている。明治 32 (1899) 年、義倉が模型骨盤骨など産婆講習に必要な器具を購入し産婆講習所に貸与したという記録があり、福山で明治時代後期には産婆の養成事業が着々と準備が進められていた。

昭和 27 (1952) 年 ●二代目 福山市医師会館 竣工
福山市医師会附属准看護婦養成所が
県知事の指定を受ける (1 学年定員 50 名)

昭和 29 (1954) 年 ●学校教育法に基づき各種学校として認可

昭和 32 (1957) 年 ●1 学年定員 50 名→60 名に増員

昭和 40 (1965) 年 ●福山市医師会附属准看護学院に改称
1 学年定員 60 名→100 名に増員

昭和 45 (1970) 年 ●三代目 福山市医師会館 紅葉町に竣工



二代目医師会館 (昭和27年竣工)

昭和 48 (1973) 年 (福山市医師会高等看護学院開校)

昭和 50 (1975) 年 ●福山市医師会附属准看護学院学則変更承認
男子入学を許可

昭和 52 (1977) 年 ●専修学校として認可
●教育カリキュラム改正 施行

昭和 53 (1978) 年 ●福山市医師会看護専門学校に改称
医療高等課程准看護婦科・(医療専門課程看護婦科)
●1 学年定員 100 名→150 名に増員

平成 2 (1990) 年 ●教育カリキュラム改正 施行
●四代目 福山市医師会館 三吉町 新築移転



三代目医師会館 (昭和45年竣工)

平成 5 (1993) 年 (医療専門課程看護婦科夜間定時制を廃し、
昼間定時制に移行)

平成 14 (2002) 年 ●教育カリキュラム改正 施行
●医療高等課程准看護科・(医療専門課程看護科) に改称
●1 学年定員 150 名→80 名に変更

平成 23 (2011) 年 ●昼間全日制 (第一看護学科) 開設に伴い、高等課程准看護科・(専門課程第二看護
学科) に改称

平成 24 (2012) 年 ●1 学年定員 80 名→40 名に変更

平成 31 (2019) 年 (専門課程第一看護学科 1 学年定員 40 名→60 名に変更)

令和 4 (2022) 年 ●教育カリキュラム改正 施行

令和 5 (2023) 年 ●高等課程准看護科 募集停止

令和 7 (2025) 年 ●高等課程准看護科 閉科 卒業生総数 6,179 名



現在の医師会館 (平成2年竣工)

入学者・卒業者数

【高等課程准看護科】

倍率 = 受験者 ÷ 入学者

年		入学者						卒業者	
		期生	定員	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	期生	卒業者数
S 27	(1952)	1 期生	50	不明	不明	46	-	-	-
S 28	(1953)	2 期生	50	44	43	38	1.16	-	-
S 29	(1954)	3 期生	50	40	40	37	1.08	1 期生	40
S 30	(1955)	4 期生	50	95	93	56	1.70	2 期生	27
S 31	(1956)	5 期生	50	89	88	58	1.53	3 期生	25
S 32	(1957)	6 期生	60	不明	不明	68	-	4 期生	48
S 33	(1958)	7 期生	60	不明	不明	66	-	5 期生	47
S 34	(1959)	8 期生	60	103	不明	90	1.14	6 期生	56
S 35	(1960)	9 期生	60	不明	不明	73	-	7 期生	56
S 36	(1961)	10 期生	60	59	不明	55	1.07	8 期生	77
S 37	(1962)	11 期生	60	89	不明	85	1.05	9 期生	71
S 38	(1963)	12 期生	60	157	不明	128	1.23	10 期生	44
S 39	(1964)	13 期生	60	148	不明	144	1.03	11 期生	70
S 40	(1965)	14 期生	100	128	不明	125	1.02	12 期生	107
S 41	(1966)	15 期生	100	199	不明	183	1.09	13 期生	115
S 42	(1967)	16 期生	100	195	180	177	1.10	14 期生	106
S 43	(1968)	17 期生	100	160	不明	157	1.02	15 期生	154
S 44	(1969)	18 期生	100	154	152	152	1.01	16 期生	148
S 45	(1970)	19 期生	100	152	不明	132	1.15	17 期生	126
S 46	(1971)	20 期生	100	不明	不明	108	-	18 期生	119
S 47	(1972)	21 期生	100	115	115	97	1.19	19 期生	127
S 48	(1973)	22 期生	100	102	102	100	1.02	20 期生	94
S 49	(1974)	23 期生	100	79	79	63	1.25	21 期生	97
S 50	(1975)	24 期生	100	137	133	113	1.21	22 期生	80
S 51	(1976)	25 期生	100	156	139	128	1.22	23 期生	63
S 52	(1977)	26 期生	100	140	128	97	1.44	24 期生	99
S 53	(1978)	27 期生	150	183	147	139	1.32	25 期生	119
S 54	(1979)	28 期生	150	181	170	157	1.15	26 期生	94
S 55	(1980)	29 期生	150	182	179	160	1.14	27 期生	110
S 56	(1981)	30 期生	150	171	164	149	1.15	28 期生	114
S 57	(1982)	31 期生	150	181	170	155	1.17	29 期生	120
S 58	(1983)	32 期生	150	217	176	173	1.25	30 期生	113
S 59	(1984)	33 期生	150	211	174	160	1.32	31 期生	116
S 60	(1985)	34 期生	150	183	165	146	1.25	32 期生	119
S 61	(1986)	35 期生	150	186	169	160	1.16	33 期生	118
S 62	(1987)	36 期生	150	229	153	135	1.70	34 期生	117
S 63	(1988)	37 期生	150	238	186	171	1.39	35 期生	105

年		入学者						卒業者	
		期生	定員	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	期生	卒業者数
H 1	(1989)	38期生	150	260	204	163	1.60	36期生	109
H 2	(1990)	39期生	150	208	195	165	1.26	37期生	144
H 3	(1991)	40期生	150	163	162	136	1.20	38期生	139
H 4	(1992)	41期生	150	189	182	166	1.14	39期生	137
H 5	(1993)	42期生	150	176	170	139	1.27	40期生	111
H 6	(1994)	43期生	150	195	185	162	1.20	41期生	124
H 7	(1995)	44期生	150	252	170	158	1.59	42期生	103
H 8	(1996)	45期生	150	292	173	154	1.90	43期生	126
H 9	(1997)	46期生	150	247	166	145	1.70	44期生	115
H 10	(1998)	47期生	150	196	140	128	1.53	45期生	126
H 11	(1999)	48期生	150	205	137	123	1.67	46期生	133
H 12	(2000)	49期生	150	218	130	119	1.83	47期生	101
H 13	(2001)	50期生	150	221	124	121	1.83	48期生	99
H 14	(2002)	51期生	80	230	86	81	2.84	49期生	102
H 15	(2003)	52期生	80	294	88	80	3.68	50期生	124
H 16	(2004)	53期生	80	228	92	80	2.85	51期生	70
H 17	(2005)	54期生	80	162	85	80	2.03	52期生	68
H 18	(2006)	55期生	80	143	88	78	1.83	53期生	72
H 19	(2007)	56期生	80	135	84	80	1.69	54期生	67
H 20	(2008)	57期生	80	158	78	75	2.11	55期生	66
H 21	(2009)	58期生	80	193	83	75	2.57	56期生	72
H 22	(2010)	59期生	80	258	85	81	3.19	57期生	62
H 23	(2011)	60期生	80	209	77	73	2.86	58期生	59
H 24	(2012)	61期生	40	213	40	37	5.76	59期生	66
H 25	(2013)	62期生	40	143	45	41	3.49	60期生	64
H 26	(2014)	63期生	40	94	45	41	2.29	61期生	40
H 27	(2015)	64期生	40	92	46	44	2.09	62期生	45
H 28	(2016)	65期生	40	98	46	45	2.18	63期生	36
H 29	(2017)	66期生	40	71	44	39	1.82	64期生	41
H 30	(2018)	67期生	40	57	46	45	1.27	65期生	39
H 31	(2019)	68期生	40	65	47	42	1.55	66期生	40
R 2	(2020)	69期生	40	50	44	42	1.19	67期生	44
R 3	(2021)	70期生	40	60	44	41	1.46	68期生	38
R 4	(2022)	71期生	40	52	42	40	1.30	69期生	40
R 5	(2023)	72期生	40	59	43	41	1.44	70期生	38
R 6	(2024)	-	-	-	-	-	-	71期生	37
R 7	(2025)	-	-	-	-	-	-	72期生	41
								合計	6,179

(注)1. 各年准看護婦学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査、平成13年以降は教務部資料(入試結果データ)参照
 2. 卒業者数は、当該年の3月に卒業した学生数(留年生を含む)

座談会

准看護科創設73年の 歩みを振り返って

▶日時／2024年10月17日（木）19時30分～21時10分

▶場所／福山市医師会館5階会議室

▶出席者（敬称略）

黒瀬康平・前原敬悟・森近 茂・児玉雅治・大石豪彦・奥村みどり（司会）

田口早苗・児島敏恵

奥村：本日はお忙しい中をお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。座談会の司会をさせていただきます、看護学校担当理事をしております奥村です。よろしくお願いいたします。

本日は、准看護科閉科に際して、所縁のある先生方からいろいろとお話を伺わせていただきたいと思います。まずは、簡単に自己紹介をお願いしてもよろしいでしょうか。

大石：私は校長になって5年目になります。児玉先生の跡を継いでやっています。2008年に理事になったときから看護学校の担当理事をしています。もう16年ぐらいになります。

児玉：大石先生の前に学校長を2年間していました。それと、この准看護科の課程を閉科するのを決定したのが私ということもあり、声をかけていただいたと思っております。

森近：もう14年も前になりますが4年間、医師会の会長をしておりました。丁度、その最後の頃にいろんな問題が起こって、じゃあ今後どういうふうな枠組みを作っていくかと、この地域の会員の先生方も含めて擦った揉んだの議論をしたのが思い出されます。

黒瀬：私は、大田先生が会長になられるずつ

と前だったと思うんですけど、38歳の時に医療センターに勤めてたんですが、その時に東川先生から、臨床検査センター委員会の委員になれって言われ、当時、紅葉町…、いまの市役所の前に医師会館はあったんですが、そこで医師会のいろんな仕事に関わり合ったのが最初ですね。

前原：細木先生のときに副会長を仰せつかっていました。看護学校に関しては、先ほどお話しされた紅葉町に、昭和から平成の初期まで授業をしに行っていたのを覚えています。あの時から15年以上准看護科で解剖学をやって、気付くと20年を超えてましたね。表彰もしていただきましたけど、ずっと看護学校には関わってきました。生徒さんに授業をするっていうのはやっぱり自分も勉強しなきゃいけないから、良い経験をさせてもらったなと思いながら、長いあいだ関わってきました。

田口：臨床で15年間看護師をした後に、1991年から30年間こちらでお世話になりました。丁度、こちらの三吉町に移転してきたばかりの綺麗な医師会館の中に入らせてもらってという状況です。あっという間の

30年でした。ただ、准看生との関わりは最初の1年間だけなんです。あとは、第二看護学科と、管理業務の仕事をさせてもらいました。でも准看生と関わった1年目の経験が私の教育の原点かなと思っているので、この凄く大事な1年間のことを少しお話できたらいいなと思っています。

児島：教員として42年ぐらいになるんですが准看護科と、それから第二看護学科の教員をして、いまは再び実習担当として准看護科の最後の実習指導をしてる状況です。准看護科の生徒さんとはいろんな経験をさせていただきました。

■准看護科が果たしてきた役割

奥村：昭和27年、本校が「医師会附属准看護婦養成所」の指定を受けたのが、医師会における准看護師養成事業の始まりとなったわけですね。それから73年の年月が経ち、准看護科から6,100名を超える卒業生を送り出してきました。

早速ですが、先生方にお話を伺っていききたいと思います。

本校の准看護科が、これまでに地域の医療や介護現場に果たしてきた役割や意義について

では、どのように感じておられますか。

黒瀬：この准看護婦養成事業というのは、私は看護教育の本当に素晴らしい唯一無二の教育システムであると今でも感じています。

いろいろ理由はあるんですが、一つはさまざまな職業を経て、専門職に至ることですね。看護師に志を抱いた方々に門戸を広げて受け入れるということ、これはなかなかできないんですね。

もう一つは、いま何かやるとすぐに補助をくれとか言いますけど、当時はたぶん全くの自助努力で、建物から講師から全てを自前でやったってことですね。これは世界広しと言え、このような教育システムは多分ないんじゃないかなと…。

そういう理由で唯一無二の素晴らしい教育システムであると。いまは、(准看護科の養成所は、全国で)100校ぐらい残ってるんですかね。

児島：本年4月現在、准看護師課程のある医師会立の養成所は127校です。5年前に170校にまで減っていたものが、この5年間でさらに四分之三にまで減った勘定になります。

黒瀬：こうした状況の中で、本校の准看護科から6千名を超える生徒たちが、主にこの





黒瀬康平先生

地域に散らばって活動なされたわけですね。その何割かは看護科に進んだと思います。この地域で計り知れない恩恵をもたらし、今でももたらしていると感じています。

児玉：なんとと言っても、この地域に看護職を輩出してきたのが一番の功績だと思います。先ほど、お話がありましたけど、講師として、一線で活躍されている地元の医師や関係者を招聘しているのも、非常にいいところだと思います。

そもそも医師会の成り立ちを考えた時に、医師会は看護学校と共にあると思います。

当初の医師会は、看護学校を開設し維持するためにできたと言っても過言ではないと思います。福山市医師会は、公衆衛生の増進と看護学校を運営していくために発足し、何度か移転してきましたが、看護学生が増えてきたというのが大きな理由の一つと聞いています。医師会にとって看護学校がいかに重要だったかということが分かります。

今、看護学校を開設しろと言われても不可能です。歴代の関係者の方々の尽力でこままで、福山市医師会として看護学校を運営してこれたと思っています。その有形無形の財産を大事に受け継いでいかないといけないと思っています。

■ 病医院での生徒たちのようすと授業風景

奥村：以前は、病院から通う生徒さんが多かったと思うんですけど、その人たちの暮らしというか、先生方が関わっておられた頃の生徒さんたちのようすをお伺いしてもよろしいですか。

前原：そうですね。そもそも医師会自体が開業医の集まりででき上がったものだから、医師会とは別に病院会っていうのがまたあってね。医師会の看護学校っていうのは、開業医のパートナーだったんですね。医師のパートナーを育てる機関として、考え方としてはそうだったと思うんですね。僕の印象では、昭和の年代の看護学生は、医療機関の院長家族の一員なんですよ。食事も皆で一緒にわいわいって言いながら食べて、そういう環境の中で皆育って、若い人は中卒の15、6歳で、高卒でも18、9歳で入ってくる。ほとんどの医療機関では、寮に住んでというより家の離れに住んでという感じでした。印象としては、親戚に遊びに来て、皆でわいわい食事をしてる感じ。

診察が終わったら外来の受付の裏に彼女たちのお部屋があって、そことかで食事でわいわいしているという感じだったと思うですよ。うちに、実は師長を長年やってくれた人がいるんですけど、その人の話では、いまでは特定医療法人の大きな病院になっちゃったんだけど、その病院が開業したときは外科のクリニックだったと。昭和の20年代、そこに生徒として入って有床診の病棟の一部で生活していたそうです。当時、病院の先生が少ないから、手術というと国立病院とか岡山大から援助に来てもらうから、大概夜の手術になっちゃう。そうすると、緊急かなんかが入るとオペ室がない、病室が足りないからと、彼女たちの部屋を空けてそこに患者さんを入

れてね、自分たちはレントゲン室とかどっかに布団を敷いて寝たこともあるんだそうです。そんな生活をしながら、でも先生はもの凄く厳しくて、怒られて泣きながら、でも頑張っていて、終わるとすぐ奥さんが来てくれて、奥さんと一緒にわいわい食事をしたり、「お疲れさん」っておにぎりを持って来てもらったりして、奥さんのお陰で耐えられたし、いまとなつては先生に厳しく教えてもらったからいまの私はあるんです…って。そんな話を聞いていると、これがあの医師会の看護学校の歴史なんだと思います。そんな中で育てていって、クリニックがいまや大病院になっていってるんですけどね。



前原敬悟先生

森近：生徒さんが当院から看護学校に通ったっていうのは、実はないんですよ。今まで不幸というか、募集にも応募がなかった状況です。逆に言うと、他の医療機関を卒業して、あるいは家庭に入った後もう一回職場復帰する時に応募で来てくれた人はいました。

今まで結構な人が来てくださってるんですけども、やはり総じて准看卒業生は優しい人に対して非常に優しい子が多くて、派手でないんですよね。所謂、見栄を張って服をもの凄くかっこ良くしてみたいな感じで来る人

はいなかった。患者さんの話を聞きながら一緒に涙を流したりしながらやってた人が多かったと思います。

20年ぐらい前に准看を卒業して再就職でうちに来てくれた子が、ある時期、大きい病院に行ってみたいと辞めたんですよね。で、市内の某公立病院にしばらく勤めたようですが、今から十数年前にある日突然来て、「近くに引っ越して来たから、またここへ来たい」って言うんです。うーん、何かあったかなと思ったんだけど、まあ来てみなさいって言いました。その子は今ね、その当時から言うと更にバージョンアップして人間的に非常に成長して帰ってきたという感じです。いつも“出戻りちゃん”という話になるんだけど、「はい、出戻りです」って言いながらにこにこやってくれてます。

これは話が別になるかもしれないんですけど、准看護課程があって、いまから恐ろしくかなり昔の段階、公的保険が無くていくらお金払って診療受けてという感じでやっていた時の私的ドクターのパートナーだったと。大学病院に看護課程が出来たのも昭和の後半だろうと思うし、岡大もそうだったと思う。この日本の医療の歴史を共に支えてきた本当に重要なパートナーであったと思うと同時に、その人たちが、今、実はその陰になって支えてくれている。数として出ないけど、この地域医療のインフラの部分は今ちょうど40、50、60代、うちでは70代もおりますからね、高齢になっても頑張ってくれて、多大な貢献があると思ってます。

当時は、無かったら医療が成り立たなかった日本だったと思います。

奥村：教員の皆さんから、生徒さんたちとの関わりの中で思い出されるエピソードなど、何かありましたら、教えていただけますか。

田口：私は、准看で1年しか経験してない

と言いましたけれど、その1年が1991年で、1学年150名の生徒さんだったんです。実習指導担当教員として、教員生活が始まりました。

母子看護実習担当と言われ、「そんな経験してもないのに出来ないです」って言うと、「出来ないことはないでしょ、看護師資格を取ってるんだから出来るわよ」って言われて…。

“これはちょっと大変なことになった”と思って、担当部署の福山市民病院の師長さんに話をし、「二日間でいいので、一緒に行動させてください。看護師さんと助産師さんと一緒に話をしながらが大事なのか知らない、私はもうとても看護学校で指導できないです。」って言ったら、「いいよ。あなたがそんなふうに思うんだったら、どうぞ」って言ってくださって。すごいなと思ったんですよ。全然知らない私を引き受けて、助産師さんと看護師さんを付けてくださって、お産も見せてもらったりとか褥婦さんのケアも見せてもらったりとか、よく理解できるように教えていただきました。その経験から、母子看護実習で学生に何を学ばせたら良いのかっていうところも何とか理解できて、本当に臨床の場から助けていただきました。

そうした経験をする中で、先輩教員から「教員は米つきバツタでないといけん」って言われたんです。「米つきバツタって何なんですか」と訊いたら、「あっち行ってお医者さんにぺこぺこしないといけないし、看護師さんにも皆にもぺこぺこして、学生が困ってたら申し訳ありません、申し訳ありません。っていうふうに言ったら、それで1年ぐらいすぐ終わっちゃうわよ」って言われました。だけど、それはちょっと違うんじゃないかなって思って。いや、そういうふうにはなるまいと…、ぺこぺこするのではなくて、自分の大事にするものをちゃんと学生や臨床に伝えていけるようになりたいなと思った1年間だったんです。

臨床での指導體制っていうところでは、非常に私は苦勞しました。だから、いま新人教員が入ってきても、そういうところで困らないようにしてあげたいなっていうことはすごく思った1年間でした。

児島：先ほど、前原先生から生徒さんの住み込みというお話をしていただいたんですが、私もそれがいちばん印象に残っています。平成4年の入学要件で、「住み込み」は削除されたんです。それまでの入学要件には「住み



込み」という記載がありました。

児玉：それは必須要件だったのですか。

児島：そうです。平成4年に削除され、入学要件からなくしたんです。で、生徒さんに、どんなだったかって訊いたら、いま、前原先生がお話しされたように、所属病院で住み込みで一生懸命働いて、院長先生と一緒に家族のようにお食事をして、実習が始まるって言ったら病院の方でお弁当作ってくださる。「美味しいですよ。」と、一人ひとりが食べていた光景を見て、温かく育てていただいているなっていうのを感じました。

それからあとは、やっぱり生活に困窮している生徒さんがいて、自分がいただいた給料を家族に送るっていう…、少しなんだけど毎月親に送ってるんです。そのような一生懸命生きてる姿も見ることもできました。

あと、准看護師の資格試験なんですけど、全員合格に向けて、教員が実習や授業が終わってから関わっていくんですけど、やっぱり生徒の能力には凄く差があって、今まで学修してなかった生徒にどうやって合格まで到達させていこうか、主体的に学修ができるように、ときに教員が褒めながら、出来てることを一つずつ積み重ねて関わっていきました。そうすると、生徒も変化して行って、自ら教科書を開いて勉強していく。最初は、資格試験が不安だなと思っていた生徒が合格するんです。人が自ら学修して変化していくというところで、私も生徒と共に学ばせてもらった。そういう経験もありました。

ちょっと長くなるんですが、修学旅行というのあって、二泊三日で沖縄に行ってたんです。沖縄から来ていた生徒も居たので、普段はなかなか帰れないだろうと学校が許可して、二泊の中の一泊は自宅に帰らせてあげました。生徒は、それは喜んでました。

それから運動会もあって、ここに居らっ

しゃる先生方も参加していただくことがあったと思うんですが、医師会館隣の東中学校でするときには、准看護科と看護科の生徒・学生だけでなく医師会職員も参加してたんです。日頃は半日だけの学校生活なんですけど、生徒たちが仮装して日頃のストレスを発散し、また医師会の職員の方とも交流をして、一つひとつ積み重ね大事に育てられて、成長してるんだなって感じたことがたくさんあります。

奥村：なんだか優しくて、地域に繋がったエピソードにちょっと感動しました。

授業や講義とかで何かありますか？

児島：アニマルセラピーということで、犬と猫を連れてこられるといったこともありました。本当に准看の授業で、「次の時間は、犬・猫と触れ合ってみましょう。」と言われて、犬と猫を2匹ずつ連れてこられました。そして、そこに病院の職員の方も参加して、みんなと触れ合うという授業も一度だけありました。

大石：いまの話を聴いていて、私も昔のことを思い出しました。私の父が、外科の有床診療所をやっていたんです。私が幼稚園ぐらいの時に福山に引っ越してきたんですが、まさに診療所の中の有床診ですから、住み込みの看護学生が居ました。学費とか、経済的な援助をしながら教育するという、まさに昭和の時代を思い出しました。

その後、看護学校に携わるようになってから、准看護師とかあまり意識したことはなかったんですけど、成り立ちとかを知ることによって、いろんな問題点とかがよく分かるようになりました。

また、私が講義してるのも准看護科なんですけど、非常にやる気のある人が多いですね。もちろん社会人だった人もいますけど、育児をしながら子育てしながら、所謂、シングルマザーの人とかも結構多くて、やる気が凄くあって、授業したらばっと質問にき

てくれますね。非常にそういう意味で教えがいがあるというか、本当に准看護科の人が一番やる気があるんだなといつも思っていました。そういった中で教えるのは楽しかったなと思ってます。

前原：私のところも有床診の時代に、朝、配膳しなきゃいけない。早朝に炊事のおばちゃんたちが来てたけども人がなかなか居なくて炊事が回らない手が足りない、そういうのも看護学生さんたちがカバーしてくれてたんですよ。

朝6時ぐらいに当時はもう寮が出来てたからどっと3人ぐらい来て、まず一番に炊飯器のスイッチを入れる。今だとタイマーですけど。でも、彼女らはまずスイッチ入れて、お湯を沸かして味噌汁の準備をする。前の日中、調理師さんたちがネギとか全部刻んで味噌も準備してくれているので混ぜるだけなんだけど、それを配膳して、終わって学校へ行く…、っていう生活をしていました。

朝早くから準備して学校へ行き、授業に行くと眠い。だけど帰ってから勉強できるかって言えば、夜は夜でまた食事のあとの食器を片付けたり、仕事をしてですよ。居眠りするのは仕方ないと思うんだけど…。でも勉強する時間がないんだから、その授業の時に聴いて、頭に入れてくれないとこっちが悪いと思うから、僕はイエローカードを作って、居眠りしてる子に「イエローカード」って、「これが5枚溜まったら、レッドカードで本試験に落ちるからね」って言って…。

でも5枚溜まった子はいなかった。そうやって皆よく頑張ったなと思いますね。そんなこともやっていました。

奥村：やはり家族の一員っていう温かい環境と学生さんの頑張る気持ちって直結してたんだなって、お聴きしていて思いました。

黒瀬：住み込みの全ての生徒さんの弁当を

作ってたって話も聞いたことがあるよ。

児島：私もそれを知ってますね。安藤先生のお母さまがお弁当を作られてたんです。

黒瀬：これは、妻からの伝え聞きなんだけど、「私がこのようにお弁当作って、分け隔てなく大切に育てるから、全部うちについてくれるのよ」って仰ってた。「へえー」と思って。そういうときも、あつたんじゃないかな。

奥村：私も、奥様によくお弁当作ってもらってました。ありがたかったです。(笑)

■准看護婦制度の存続運動

奥村：ところで、平成7年(1995年)9月、朝日新聞に『准看護婦の養成をやめよ』という社説が掲載され、准看護婦制度の存続について福山市医師会から日本医師会を通じて国に働きかけたということがありました。このときの状況を教えていただけますか。

黒瀬：ちょっと堅苦しい話になるかもしれませんが、私が知っているかぎりお話しします。今でもよく覚えてますが、大田先生は凄かったなと思うんですね。あれは確か、大田医師会長の3期目のときだったと思うんですね。大田先生はアクティビティー高いから、あらかたやり尽くして、なにか仕事がないかなと思っていた、そういった時期じゃなかったかなと思うんです。これは、政治的な問題だったんですね。当時、看護業務を決定する権限は、厚生省の看護課にあったんですよ。今でもそうです。

当時、1980年頃から東京大学の看護科出身の看護師さんが、その課長ポストに座ってたんですよ。問題はそこから起こったんだと思います。彼女たちはね、1980年ぐらいからもう准看護婦制度を無くすべきであるという議論を、内部で凄くしてるんですよ。だからそれをある大手の新聞社にリークしたんだと思います。そして朝日新聞がそれを取り

上げた最大の理由は、彼女たちが被害者であるというスタンスだったんですね。搾取される側の被害者であると。

例えば、家に住み込んで労働力を提供するってというのは、ちょっと豊かな時代になったら、見方によってはそういうふうにも映るところもあるんですね。そういったときに起きたように思います。だから、朝日新聞は厚生省の意向を酌んで多分記事を書いたんだと、当時、私は思ったんですね。

で、大田先生が取った行動が凄かった。所謂、弱者である虐げられたとされる准看護科の生徒を反対運動の先頭に立たせたんですよ。で、彼女たちとこういった教育課程がなくなるのはどう思うか、いろいろ話をされたんだろうと思いますね。

あと、大田先生は、朝日新聞の本社まで抗議に行ったはずですよ。「看護学生がそう言ってるんです」と…。そうしますと新聞社としては、被害者である人たちが「私たちの教育の場を奪わないで」と言ってくるわけですから、もう対抗しようがないでしょ。

当時、大田先生から聞いた話では、厚生省の看護課長にも会いに行かれています。それで、より改善していい形で進めようじゃないかという合意をしたという話を聞いています。でも、あまり厚生省は動いてませんけどね。

あと当時、日本医師会の会長だった坪井先生、彼にも会いに行っています。坪井先生のところは、わりと大きな病院じゃなかったかなと思うんですけど、表立ってはあまり動けなかったんじゃないかなと思います。

前原：いろんな先生がいるからね。

黒瀬：ある程度の規模の病院だから、准看護師の生徒っていう現場をあまり分かってなかったんですね。でも大田先生の活躍で、私の感覚では、そういった動きはぴたっとそれ以上に広がりを見せなかったんですね。

それから20年近く見ると、色んな意味で締め付けが起きましたね。准看護科がやりにくいように施設基準を広げたり、お金がなきゃ出来ないようなことを次から次にやってきたように思います。

前原：医師会館1階のガラス扉に“医師会



立看護学校死守”のポスターが、ベターと一面に貼ってあったのをしっかり覚えてます。

なぜ今、こういうふうになって看護学校がどんどん、じわじわ減っていったのか。うちの看護部長にどう思うかと訊くと、やっぱり病院の看護比率、准看と正看の看護比率が何パーセント以上ってルールがあるんだろうって言っていました。

先生方をご存知ですか。医療機関で看護師と准看の比率って昔はあった。僕はいま、病院と関わってなく老健の方に移ったから、最近はどうなってるのか知らなくて…。何年前から准看は採用しないっていう病院が増えてきた。

黒瀬：いや、ほとんどそうだと思いますよ。

大石：准看護師は看護師としてカウントされないんです。どんどん7対1とか、看護師じゃないと病院では通用しないという形になってしまった。

前原：あと、看護師の給与面について聞いた話では、「4年制大学を出てるのと出てない

のとでは、同じ看護師であっても給料が全然違う。」っていうから、「じゃあ医師会立の看護学校はどういうふうに対抗していけばいいんだらうね」と。みんな、大学を目指していくのかって話になりました。

田口：看護教育で、学ぶべき内容がもの凄く大きく増えてきています。いま、3年課程のカリキュラム102単位ですかね。3000時間ちょっとだと思っただけけれども、それを3年間で学修させる。

で、もっともっとたくさんの内容をこれから学修させるとなると、やはり3年間じゃ難しいっていうのがすごく言われてきていて、大学化するか、専門学校も4年制にして学修する内容をもう少し増やしていったというふうなところを検討していかなければいけないという現状です。

前原：そういう学修内容が医学部も、医師の我々もついていけないぐらい膨大になっていっている。看護師さんも同様に膨らんでいっているのが現実で、そうすると准看の今の



ルールでは、ついていけないんだということになってくると、そこに、今後の医師会立看護学校の行き方が見えてくるのかなと。

あと、給与面が違う。それは大きいんだろうけど、学費が全然違う。うちの第一看護学科とよその専門学校とでも全然学費が違う。僕のとこの看護部長は、「医師会立は安いです。親はみんなそっちへ行って欲しいですね。」と言ってました。将来、同じ看護師でも認定看護師とかのレベルや、別のランクが出てきてるから。

医師会立は、やっぱり学費が安く3年で取れる。そういうところは凄いメリットとして親も思っている。

■卒業生の地元定着に向けて

前原：もう一つは、ちゃんと学生たちに、あなた方は福山市から学費支援されて育てられてるんだっていうのもっとしっかり教えていかなきゃいけない。以前、うちの卒業生が福山市からどれだけ出ていったのか調べていたじゃないですか。

もっともっと医師会の学生さんたちには、福山市からあなた方は育てられているんだっていう意識を持ってもらう必要がありますね。

児玉：福山市だけでなく、医師会・国・県からも支援を受けています。

森近：養成機関のある地域から看護師、准看護師とも外に出ていく。酷いところは半分ぐらい出ていきます。どこに行くかと言うと、やっぱり大都会。労働分野の専門家に言わせると、やっぱり最低賃金が高いところへ人は集まります。だから、いまの地域別の最低賃金のやり方では、地方はだんだんと人がいなくなるのは当然ですよ。全国统一にすると、地方は最低値に入れるかなっていうところもあるけど…、そういう見方もあります。

それから、福山だけでなく、学歴を求め



森近茂先生

る世相というか、子どもが少なくなればなるほど、親とすればやっぱり大学に行かせたい。看護分野に進もうという人の全体は分からないけど、この地域の高校生の卒業生の数と看護学校への応募の人数が何パーセントぐらい減ってるか、医師会の看護学校に進学する地元高校の卒業生の割合は、どうなのか。本校以外の看護学校に行っている割合が増えているかもしれない。実際は、高校生がどれだけ看護分野に進んでるかということも、本当は把握しておかなければならない。全体が抜けていっている感じ。看護分野から抜けていって可能性がある。

なぜかと言うと、人手不足の中で、基本的にどの分野に就職しても、医療分野よりも給与、初任給は高い。その分野はそれだけ払えるんですよ。医療の場合は、公的医療とかで厳格にコストが決められてるから、ちょっと給与を上げてあげましょうって言うてもね。

前原：診療報酬は全国一律ですもんね。

森近：ちょっと上げたからといって長続きしないですもんね。そういう構造的な問題が背景にはある。ちょっと話がずれましたけど、難しい問題ですね。

黒瀬：私はこの春に、世田谷の100床程度の法人病院を訪れる機会があったんです。昭

和の 20 年か 30 年ぐらいに建てられた凄く古い病院だったんです。たぶん、高齢の看護師さんが中心で、寝たきりのお年寄りばかりの病院だろうと思って行ったんです。親戚の者が入院していたんで、お見舞いでね。

ところが建物はすごく古いんですが、中にいるスタッフはみんな若い。私が見た範囲では、5~10 名ぐらいの看護師さんが入れ替わり立ち替わりでテキパキと働いてるんです。たぶん皆、30 代前の看護師さん、独身のような、綺麗なユニフォームを着てました。この人たちは、一体どこから来たのかなという感じですよ。やはりいくら地元に着いて欲しいと考えても、彼女たちの自由な発想には敵わないんですよ。これが現実だろうと私は思いました。やっぱり都会は“華”があるし、楽しいんですよ。

でも、なんでこんなに集まるのかなと思って、募集要項を調べたんです。やっぱり給与が高かったです。この辺りよりは少なくとも 3 割以上高い、1.5 倍ぐらいでした。よく払えるねと思ったんです。でも、それで人は集まるんだろうけど、建物に回すほどのお金はないという、こういうことなんですよ。

森近：どこへ注力しているかですね。

黒瀬：教員の先生方には学生たちに教えて欲しいんだけど、ワンルームを借りて東京に住んだとして、40 歳近くになってお金が貯まってると思いますか。無理です。学生さんたちはそれに気が付いてないですね。でも、最近気が付いた学生さんもいると感じているんですよ。

近くに親が居て、子育てに参加してもらえよう場所に住むという子は増えているんじゃないかな。そういったことを、ぜひ上手く宣伝してほしいです。

地元へいつか就職しなさいっていう形じゃなく、やっぱり子育ての援助の手が近くにあ

ることがいかに大切かっていうことを教えるべきだと。アラフォーになって大して貯金もなく、都会のそういう病院に限って、ある一定以上になったら給料を多分上げないと思います。まあ、これは憶測ですよ。そういったことで作戦を変えるべきだと思いますね。

■看護学校の展望

奥村：最後に、看護系大学や公立・私立養成所がある中で、医師会立の看護学校に期待することや、今後の展望についてお話を伺いたいと思います。

大石：日本医師会が令和 6 年 5 月、全国の医師会立看護学校の養成所が今どうなっているかを調査しています。

やはり、学校の数がどんどん減っていて、中でも准看護課程の募集停止がどんどん進んでいっています。平成 31 年と比べても 43 校が無くなっている。それに伴って、入学定員も 5 年前の平成 31 年度には 7,967 人であったものが、今年度は 5,476 人と 7 割弱にまでに減少しています。また、入学の応募者も、平成 31 年度が 9,557 人、令和 6 年度が 3,765 人と 5 年前の 4 割を切るという状況です。したがって、入学・卒業の経年変化について、少子化の影響もあり、どんどんシュリンクしていくのを見てとれます。

本校も、私が理事になった頃は、准看護科の入試に 200 人とか 300 人とか受験があって、10 人ごとに面接をして合格者を選ぶことができてたんですけど、いまは受験生のほとんどを合格としないと定員に満たない状況です。福山は、それでもまだマシな方なんですけど、周辺の学校はどんどん閉鎖されていきました。

いまは、中には学習習慣のない人たちが居て、工夫や労力が必要になっています。私たちもこれからの准看護科をどうするか非常に



大石豪彦先生

悩んできたんです。

いちばん困ったのは、実習施設の確保なんですよね。というのが、基幹病院に実習協力をお願いしても病院幹部に准看護師を養成することの意味や意義を感じて貰えない人が多く、否定的というか受けてもらえない。准看護師の何割かは、いずれは看護師になるわけですから、どういうふうに説得すればよいか考え続けました。今後どうしていくか、厳しい判断をしなければならなくなりました。

児玉：問題がいくつかあって、一つは教員の問題。うちは3課程あることで非常に効率が悪くて、各課程で教員数を揃えないといけない。揃ったと思ったら、誰かが辞めるということもあって、教員確保に苦労してたという現実がありました。実習でも、課程が違くとそれぞれの実習施設について行く実習指導教員も必要になってきます。

もう一つは、そもそも全課程の受験者の数がかかり減っていたこと。私の中では、准看護科だろうが看護科だろうが、とにかく看護職を養成しないといけないという思いがありました。第一看護学科をつくった時もそうでした。私の中ではもう准看護師とか看護師とかを言ってる場合じゃないだろうという意識がありました。

そういうことを考えると、准看護科は閉鎖

して看護師養成の方へ集中すべきだろうという判断で、担当の大石先生と話し、他の理事にも相談して方向を決めました。

奥村：准看護科の閉科について、現場からの反響は何かありましたか。

前原：少子化で、とにかく受験する子どもたちが減っていくんだから、ある程度やむを得ない。

どこかで削っていかなければいけない分野があって、今回の医師会の判断は、うちのスタッフたちに伝えても意外とびっくりしていなかったですね。頭の中には、“全国的に減っているから福山もやはりか…”という思いはあったんだろうと思います。ただ私は、児玉会長と大石先生が随分悩んだなというのは、すごく感じていました。准看護科の閉科について、大石先生から会議の中で僕に訊かれたことがあったと思うのですが、あとから考えると、長く准看の歴史を見てきてたから、思いを訊かれたのかなと。

准看護科閉科はそれが流れなんだなと思います。学生たち、看護師さんたちが勉強しなきゃいけない内容が膨大になってきていることも大きな原因なんだと思います。また、診療報酬の部分でも看護助手のポジションが新



児玉雅治先生

しく出来て、今まではなかった看護助手が病棟で医師や看護師の仕事に補佐するようになった。看護補助者や病棟クラークのポジションが確立され育ってきてる。これだけ変わってきてるんだっていうのを正直しみじみと感じてます。

児玉：少子化についてですが、福山市内のほとんどの小学校で各学年1~2クラスとなっています。私の出身校である緑丘小学校は、当時はマンモス校で4~5クラスありました。今でもプレハブがあるからまだ多いんだろうなと思っていたら、2~3クラスだったんです。将来、福山市は本当にどうなるんだろうかと心配になります。看護学校も、受験者はもちろん、教員なども少なくなることを前提に考えていないといけないと思います。

森近：その話は、おそらく医療だけじゃなくて、全てですもんね。

児玉：少子化の中で、いかにして医療看護の分野に来てもらう努力をするかが必要だと思います。どんな方法がいいかは、分かんないですけどね。

森近：子育ての時に見ててくれる人がいない、これがやっぱり復職の障害となる一番だから…。

黒瀬先生もさっき仰った、「福山で子供を育てれば、じいちゃん、ばあちゃんがおるよ」。これは大きなキャッチフレーズになる。「よく考えてごらん」って言ってあげないと分からない。先生が言われた、「長年の経験で、40才になったらそうなるよ」って話は生徒たちに入れておくといいかも知れない。

黒瀬：そういったことが理解出来る若者は、増えてきてるなという気がしますね。きらきらとした都会に憧れて親の言うことはきかないっていう人は昔から居たんだろうけど、そういう人たちは多分非常に減ってくると思います。地元に着いてくれる。10年ぐ

らい経つとがらっと変わってるんじゃないかなという気がしてますね。若い人も世の中をちゃんと見れるような情報がすごいですからね。ちょっと楽天的かもわからないけど。

森近：Uターンしようとか、そういう人だって出てくるから、その受け皿はやっぱり必要です。もう一つ、子供さんが病気になったときの受け皿。今から十数年前にこの地域でいろんな話を聞いてる時に、病院の管理者や院長から、「やっぱりそれが困るんだ、なんとかそうした受け皿をつくれなかな」っていう話もあって、いろいろと検討したことがあります。いろんな障壁があって、実現はできなかったんですけど。

この課題を一番に提示してくださったのは、循環器病院の治田さんだった。「客観的なものの見方としてこういうことは大事だと僕は思うんだよ」と、いろいろ議論しました。実際、いま全国的にそこが問題になっている。その辺りが福山地域を支えていくヒントになるかもしれないですね。

結局は、どうしてもさっきの学歴の問題というのは、ずっとついて回ると思います。より高学歴的なことを実際は頑張ればいいんだけど、そういう名目上のものを求めるのは、人の心理としてあるからね。

看護大学とかがあって、その横に我々のような看護の専門学校があることで、ある程度のレベルは保てるようにすれば地域を充足させることが可能かもしれない。全てを大学に頼ってしまうとしたら、ちょっと足らなくなるんじゃないか。だから、目的は、補助的なところでどんどんナースを養成していく。基幹病院にいくらかとられるのはしょうがないとしても、結婚してちょっとして辞めたという人材が地域のクリニックに帰ってきてくれたみたいなのが出てくることで、結果的には人材が回ってくる部分があることを意識して



田口早苗先生

おくことは必要。だから諦めてしまう必要はないというふうに思っています。

田口：凄く難しい問題だと思います。やはり、18歳人口もどんどん減っていくのはもう分かっているわけだから、じゃあ、その担い手を拡大していくためには、どういう方法があるのか。

18歳じゃなくって、社会人経験者の学び直しだとか、あるいは海外から来てる人だとか、既卒者だとかいろんな人たちをもうちょっと取り込む方法を考えていかないといけないと思います。

あと、さっき前原先生がクラークの話もされましたけれども、いろんな職種の人たちと役割分担がうまくできて一緒に働くことも十分できる中で、これからの看護がどういうふうな役割を担っていくんだろうか、っていうことをすごく考えさせられています。そうやって考えていったときに、どういうふうな養成制度に持っていけばいいのかなっていうのを考えていかなきゃいけないんだろうなと思ったりしています。この仕事はクラーク、この仕事は検査技師、この仕事は介護士というふうに役割分担する中で、健康と生活を支援するためのコアになるものが看護のやらな

きゃいけない役割だと思うんですが、そのために何を学ばよいかを考えていけば、もう少しスリム化してカリキュラムとかも考えていけるのかなと思ったりしますけれど、ちょっとまだ考え中です。

児島：いま、実習病院で3人の生徒の指導をしてるんですけど、3人の中の2人は子育てをしながら学校に来ています。話を聞いたところ、やっぱり入学する時にはとても不安だった、子育てをしながら両立が難しかった、だけど学校に来たら一人ではなくって、一生の友達がこの学校でできたと言っていました。医師会の卒業生っていろんなところで活躍されていて、管理者さんだったり看護部長さんであったり師長さんであったりといらっしゃいますが、いま実習に行ってる病院の指導者さんにも、卒業してこんなに素敵な看護師になられてるという方も居られます。

田口先生が言われたように、看護師の役割は何かって考えたときに、やっぱりその人一人ひとりの背景を考えて、その人らしく援助できること、ときには、いろんな他職種と連携を取りながら、看護師としても日々の援助を振り返りながら、患者さんにとってどうだったのかっていうのを考えられる人、自己研鑽が出来る人を育てていければいいと思います。

一生の友達ができたというのも凄いなと思っていて、いっぱい不安があった中で良い出会いを学生はしてるんだなと思うと嬉しいし、良い学校だなとつくづく思いました。

黒瀬：看護師課程に進んでおられる学生さんの中で、改めて第二の人生で入ってきた方々がどの程度おられますか。ごく少数だと思うんですが…。

児島：3割ぐらいです。

黒瀬：これが素晴らしいと思う。看護教育機関の最大のメリットは、フリースタンスなん

ですよ。

看護大学とかね、公的な看護教育機関っていうのは、ほとんど新卒だと思います。新卒しか入らないような入試システムだと思う。

いまは、80、90まで生きる時代ですから、なにも19歳で取らなくていいわけですよ。30歳でも十分なんだと思うんです。体力的に現場で持ち堪えるかなという心配はありますけど、この3割は、医師会立看護学校の特徴だと思うんですよ。それは活かすべきで、アピールすべきだと思う。

それとカリキュラムをちゃんとこなして成績優秀で国家試験に通る子を育てるのは最大の目標ですけど、フリースタンスというのは自由にいろんなことができるっていうことなんです。

そこを是非上手く活かしてほしいなと思いますね。やはりこういう医師会立の看護教育機関と日本の中の看護教育機関とよく連携を取って、オンラインで校外講師を選んで興味を持つような講義をすとか、看護教育に限らずAIの講義でもいいですしね。そういうところを、是非考えてほしいです。しかも学費が安い、そういったところをアピールすべきですよ。

前原：子育てしながら学校に行けるシステムをもっと、考えていかないと。

黒瀬：子育ては流石になかなかハードルが高いと思うので、子育てが終わったぐらいからでもいいんですよ。そういった方でやる気のある人もいますよ。繰り返して言いますが、そういった方々が基幹病院に勤めて、体力的に持つかなというのが一番の心配事ですが、さまざまな生徒を集めてアピールしていけたら良いと思いますね。

あと、校外講師はお金のかからない地元の有名人などに頼むのも良いと思います。面白そうな講義は全国でオンラインで、学校間で

共有し流せばいいわけですね。そういったことを考えていただければ、人は集まるのではないかなと思います。言うは易しですけど。

児玉：永遠の課題ですよ。

黒瀬：合格率が良いのもね、アピールするべきです。

僕は開業する前、医療センターの看護学校で講義をしてたんですが、頭の良い子を探る必要はないんですよ、やる気のある子を探ればいいんです。

38歳の頃、紅葉町にあった学校に夜遅く行ったら、100人以上の生徒が居てびっくりしたことがあるんだけど、狭いところで講義してたでしょう。でも、ずっと合格率がいいんだから是非宣伝すべきですよ。今でも負けてないでしょ。

児玉：広報に関して言うと、例えば駅前のデジタルサイネージなどもしていますね。

大石：ラジオとか、いろいろやっただけど。

黒瀬：学校アピールするのが凄く上手な人に見てもらえればとは思いますがね。コストを抑えて、なにしろ全部自前ですからね、大変だね。

前原：将来像として、ちょっと極端な例かもしれないけど、特定看護師はすごいハードル高いなと思うんだけど、でも、まさに子どもを育てながらやってる人たちですよ。夜、自分が勉強しなきゃいけないときに、子どもたちに「これから1時間勉強するから、宿題持ってきて私と一緒に勉強しなさい」って一緒に勉強して、夫もそれを理解して協力してくれて、それをずっと続けて資格を取ったという話を聞きました。

放課後デイサービスっていういろんな所にあるんですね。こういうのが発達して増えてくると、看護学校に通う環境も整ってくるんじゃないかなっていう感じもしてるんですけどね。だから、卒業生の合格率も高いし学費も安い

し、そういう面で頑張っていけば、状況は厳しいけれど、まだまだ社会的には必要とされる分野なので、頑張っていかなきゃいけないと思います。

将来、保育所付きの看護学校があったって良いんじゃないかと思うんですけど。

森近：もう一つ、看護師の再教育の問題があります。これは看護協会も、いろんな手を打っているけどなかなか実効には繋がっていったないみたいだから、看護学校レベルでは荷が重いかもしれないが、それでももし余力が少しできたら再教育的なところへ少しでも時間がとればいいね。何十時間は必要ないから普通の新しい課題に関して、“地域の看護師さん来ませんか”ということアピール出来ればと思う。それもリモートがあればもっと簡単だろうと思います。

そういうことも取り入れて、福山市医師会の看護学校は、“合格率は良い”、“勉強は困ったことやタイムリーな話題を講演してもらえる”、最後は“お金も安いよ”、“地域で子育てしたら、お父ちゃんや、おじいちゃん、おばあちゃんが応援してくれるよ”、そういうことを総合的にアピールしていけば良いと思います。やはり合格率は、とても大きなファクターになってるよ。自信持って、やられたら良いと思う。よく頑張られてると敬意を表します。なかなかじゃない。

児玉：少なくとも、県内では最も頑張っていると思います。援助はしていただいているのですが、それ以上に、自助努力でなんとかしようとしているのは福山だと思います。

大石：補助金をもらえたらなんとかなるというのは、なかなか解決にはならない。

児玉：補助金をもらうだけでは、根本的なところは解決しないですよ。

准看護科は募集停止になったけど、看護課程のオープンスクールの状況は以前に比べて、

反応はどうか。

事務局：賑わっています。アンケート調査では、すごく好評をいただいています。

児玉：やっぱりそれなりの関心度は、あるんですよ。

森近：地域の中学校では職業体験を行っている。夏休み頃、毎年うちも二人ぐらい受け入れていますが、興味持ってくれてる人は結構いますよ。

児玉：子どもさんに体験してもらうことが、すごく大事だと思います。

森近：各医療機関にやりませんかと働きかけて、オープンスクールにも来てもらってというのも良いかもしれない。

児島：昔は健康フェアもありましたよね。小学生などが来て、白衣を着て体験学習をしてもらってました。今は、市民病院とかで小中学生を対象にされています。



児島敏恵先生

児玉：子どもじみたものではなく、本格的なのを体験してもらうことが大事だと思います。そういう意味で、健康フェアでの取組は良いことだったと思います。これが、じわじわって効果が出てくると思うんですけどね。希望者が多く、断らないといけなくらい、参加者がありましたよね。

児島：ちっちゃい子が白衣を着て、臨床検査課の人たちが顕微鏡でいろんなものを見せて、お医者さんもナート（縫合）の仕方とかで協力いただいて、あと薬剤師さんも来ていろんなお薬を作ってくださって、いろんな体験がありました。アンケートも子どもの反応が凄く良かった。

コロナで中止になりましたが…。

児玉：そうでしたね。医師会職員は大変だったと思いますが、いろいろやっていかないと、看護学校の受験者も尻すばみになっていくと思います。

奥村：今後の展望について、いろいろな素晴らしいアイデアをいただきましてありがとうございます。また、本日は、多面にわたりいろんなお話を伺わせていただき、准看護科の足跡に触れることができ、大変有意義な時間を持つことが出来ました。

本校は、昨今の情勢を受けまして、来春には准看護科が、その3年先には第二看護学科が閉科となりますが、今後も地域の医療・



奥村みどり先生

介護現場に、安定的かつ継続的に看護人材を送り出し、市民の健康と暮らしを守っていくという本校の使命に何ら変わりはありません。引き続き、関係者の皆さまのご指導やご協力を仰ぎながら、今後もその使命を果たしてまいります。

本日は長時間にわたり、誠にありがとうございました。



73
years

The Fukuyama
Medical Association School of Nursing

人間性豊かな看護をめざして

令和 4 年度 教育課程 教育理念

本校は広島県東部に位置し、設置主体は福山市医師会である。その歴史は大正 4 年に始まり、その時代に即応した看護教育の変遷をたどってきた。卒業生の多くは、主に福山市を中心とした地域住民の保健医療福祉の充実に貢献している。

現代は社会状況の変化と急激な医療の進歩に伴い、慢性疾患が疾病構造の中心となっていることから看護の場は医療施設のみならず、地域住民の生活の場へと拡大している。また、人々の健康に対する関心が高まってきたことにより、健康の保持増進のために自らの生活を見つめ、それをどのように改善すべきか、そして、社会全体がどのように支援していくかが課題とされている。そのため保健・医療・福祉が一体となり、より一層人々の健康と幸せを担っていくことが求められている。

本課程が養成する准看護師も、専門職としてより高度な知識・技術が求められる。准看護師の役割は健康の障害を持つ多様な場に生活する対象者への援助を実践することである。単に指示を受けて援助を行うだけでなく、指示の示す内容を受け止め、さらに情報や知識を用いて発展させ、対象者に応じてより安全に、安楽に援助ができる能力が必要とされる。

人間関係が希薄になりつつある現代、社会に対する関心の低さや生活体験の不足など、学習者の抱える問題も大きい。看護職として必要な人間性を身につけるために、学習者個人の持つ資質を調和よく発展させながら、優しさ、礼儀正しさを養う。また対人関係技術を学ぶことで、対象を尊重し、あらゆる対象に対応できる基本的な能力を養う。

看護の領域も細分化した専門性が高まっている中で、常に対象者の側において、対象者の立場から、日常生活を支え、喜怒哀楽をともに分かち合い、心から対象者と関わることができるような准看護師を育成する。また、卒業後により専門性を求めて自己成長させていくことができるような基盤を身につける。

1. 単に指示を受けて援助を行うだけでなく、指示の示す内容を受け止め、情報や知識を用いて発展させ、対象者に応じた安全・安楽な援助ができる准看護師を育てる。
2. 常に対象者の側において、対象者の立場から日常生活を支え、喜怒哀楽をともに分かち合い、心から対象者と関わることのできる准看護師を育てる。
3. 卒業後により専門性を求めて自己成長させていくことができるような基盤を身につけた准看護師を育てる。

教育目的

准看護師となるために必要な専門教育を行い、地域・社会に貢献できる准看護師を育成する。

教育目標

1. 生命の尊さを理解し相手の立場に立って考え、一人ひとりの人間を尊重する豊かな人間性を身につける。
2. 対象者との良好な関係を築き、維持していくための対人関係能力を身につける。
3. 人間を身体的・精神的・社会的側面から理解し、生活者としてとらえる基礎的な能力を身につける。
4. 准看護師として健康障害を持つ対象者に応じた安全・安楽な日常生活の援助・診療の補助が実践できる基礎的な能力を身につける。
5. 保健・医療・福祉チームの中で准看護師の役割を理解し、協働できる基礎的な能力を身につける。
6. 看護職として主体性を持って学び、自らの課題に取り組み継続して自己研鑽できる基礎的な能力を身につける。

令和4年度新カリキュラム〈高等課程 / 准看護科〉

授業科目と時間数

分野	指定規則		本校		
	教育内容	時間数	授業科目	時間数	
基礎分野	論理的思考の基盤	35	論理的思考の基礎	18	
			ICTの基礎	17	
	人間と生活・社会	35	人間関係論の基礎	11	
			心理学の基礎	11	
倫理と社会の基礎	13				
小計	70	小計	70		
基礎専門分野	人体の仕組みと働き	105	人体の仕組みと働きⅠ	31	
			人体の仕組みと働きⅡ	37	
			人体の仕組みと働きⅢ	37	
	栄養	35	栄養	35	
	薬理	70	薬理Ⅰ	35	
			薬理Ⅱ	35	
	疾病の成り立ち	105	疾病の成り立ちⅠ	36	
			疾病の成り立ちⅡ	34	
疾病の成り立ちⅢ			35		
保健医療福祉の仕組み	35	保健医療福祉の仕組み	20		
看護と法律		看護と法律	15		
小計	350	小計	350		
専門分野	基礎看護	看護概論	看護概論Ⅰ	30	
			看護概論Ⅱ	17	
			看護概論Ⅲ	23	
		基礎看護技術	245	看護の共通技術Ⅰ	20
				看護の共通技術Ⅱ	15
				日常生活の援助技術Ⅰ	32
				日常生活の援助技術Ⅱ	33
				日常生活の援助技術Ⅲ	35
				日常生活の援助技術Ⅳ	23
				診療の補助技術Ⅰ	31
				診療の補助技術Ⅱ	29
				診療の補助技術Ⅲ	27
	臨床看護概論	70	臨床看護概論Ⅰ	24	
			臨床看護概論Ⅱ	27	
			臨床看護概論Ⅲ	19	
	成人看護	210	成人看護Ⅰ	29	
			成人看護Ⅱ	26	
			成人看護Ⅲ	31	
			成人看護Ⅳ	31	
			成人看護Ⅴ	38	
	老年看護	70	老年看護概論	15	
			老年看護Ⅰ	10	
			老年看護Ⅱ	30	
	母子看護	70	母子看護概論	15	
			母性看護Ⅰ	13	
			母性看護Ⅱ	15	
			小児看護Ⅰ	14	
精神看護	70	小児看護Ⅱ	13		
		精神看護概論	15		
		精神保健	15		
		精神看護Ⅰ	11		
精神看護Ⅱ	29				
小計	735	小計	735		
臨地実習	基礎看護	210	基礎看護実習Ⅰ	基礎看護実習Ⅰ-①	30
			基礎看護実習Ⅰ-②	38	
			基礎看護実習Ⅰ-③	38	
			基礎看護実習Ⅱ	104	
	成人看護	385	成人・老年看護実習Ⅰ	成人・老年看護実習Ⅰ-①	78
				成人・老年看護実習Ⅰ-②	78
	老年看護	70	成人・老年看護実習Ⅱ	成人・老年看護実習Ⅰ-③	77
				成人・老年看護実習Ⅱ-①	76
母子看護	70	母子看護実習	70		
精神看護	70	精神看護実習	70		
小計	735	小計	735		
総計	1890	総計	1890		

准看護科 教育課程の変遷

1852～1976年度

1977～1989年度

1990～2001年度

2002～2021年度

課目	総時間数
専門科目	
解剖生理	45
細菌学及び消毒法	30
食餌療法	30
個人衛生	30
薬理概論	15
疾病と健康の社会的考察	20
関係衛生法規	10
家事家政	30
計	210以上
一般看護法	
看護史及び看護倫理	10
看護原理及び実際	100
内科疾患及び看護法 (伝染病を含む)	80
外科疾患及び看護法 (整形外科)	50
小児科及び看護法 (小児保健指導を含む)	40
産婦人科疾患及び看護法 (新生児含む)	30
眼科歯科及び 耳鼻咽喉科疾患	15
皮膚泌尿器疾患 (性病を含む)	10
理学療法	10
精神科疾患及び看護法	25
計	370以上
総時間数	580以上
病室その他の勤務	
科目	週
内科 (伝染病を含む)	16
外科	16
小児科	8
産婦人科	6
手術室	4
特別食調理室	4
小計	54週以上
外来勤務	
科目	週
内科	2
外科	2
小児科	2
産婦人科	2
眼科歯科耳鼻咽喉科	3
皮膚泌尿器科	2
小計	13週以上

課目	総時間数
専門科目	
解剖生理	70
細菌学及び消毒法	35
食餌療法	34
個人衛生	35
薬理概論	30
疾病と健康の社会的考察	24
関係衛生法規	20
家事家政	30
看護史及び看護倫理	28
看護原理及び実際	128
内科疾患	45
内科看護法	55
外科疾患	40
外科看護法	45
小児科疾患	35
小児科看護法	35
産婦人科疾患	35
産婦人科看護法	40
精神科疾患	15
精神科看護法	15
眼科疾患	10
耳鼻咽喉科疾患	10
歯科疾患	10
皮膚泌尿器疾患	25
理学療法	10
整形外科疾患	15
整形外科看護法	19
放射線科	10
臨床検査	10
教養科目	
数学	30
国語	30
音楽	30
合計	983以上
病室その他の勤務	
科目	週
内科 (伝染病を含む)	9
外科	7
小児科	4
産婦人科	4
眼科・耳鼻科	2
手術室	3
特別食調理室	2
精神科	1
小計	32週以上

科目	本校時間数
基礎科目	
国語	35
音楽	35
外国語	35
保健体育	35
数学	30
社会	35
小計	205
専門基礎科目	
解剖生理	70
栄養	35
薬理	35
病理	15
微生物	35
保健医療	20
関係法規	15
精神保健	20
小計	245
専門科目	
基礎看護	看護概論 35
	基礎看護技術 175
	臨床看護概論 35
成人看護	105
老人看護	35
母子看護	70
小計	455
基礎看護実習	105
成人看護実習	385
老人看護実習	
母子看護実習	105
小計	595
合計	1,500
学校行事・その他の活動	100
総時間数	1,600

科目	本校時間数
基礎科目	
国語	35
外国語	35
数学	15
レクリエーション活動援助法	20
小計	105
専門基礎科目	
人体のしくみと働き	105
食生活と栄養	35
薬物と看護	35
疾病の成り立ち	70
感染と予防	35
看護と倫理	35
患者の心理	35
保健医療福祉の仕組み	35
看護と法律	35
小計	385
専門科目	
基礎看護	看護概論 35
	基礎看護技術 210
	臨床看護概論 70
成人看護	165
老年看護	45
母子看護	70
精神看護	70
小計	665
臨地実習	基礎看護 210
	成人・老年看護 385
	母子看護 70
	精神看護 70
小計	735
合計	1,890
学校行事・その他の活動	140
総時間数	2,030



73年間 お世話になった実習施設

福山市医師会看護専門学校 高等課程准看護科

年 度	実習施設
S27 (1952)	国立福山病院
S51 (1976) ~ S53 (1978)	国立福山病院・公立学校共済組合中国中央病院
S54 (1979)	福山市市民病院
S55 (1980)	福山市市民病院・公立学校共済組合中国中央病院
S56 (1981)・ S57 (1982)	福山市市民病院・公立学校共済組合中国中央病院・医療法人福山仁風荘病院
S58 (1983)	福山市市民病院・医療法人福山仁風荘病院
S59 (1984) ~ S62 (1987)	福山市市民病院・公立学校共済組合中国中央病院
S63 (1988)・ H元 (1989)	福山市市民病院・医療法人福山仁風荘病院
H2 (1990)	公立学校共済組合中国中央病院・医療法人福山仁風荘病院
H3 (1991)	公立学校共済組合中国中央病院
H4 (1992)	公立学校共済組合中国中央病院・日本鋼管福山病院
H5 (1993)	公立学校共済組合中国中央病院・日本鋼管福山病院・医療法人福山仁風荘病院
H6 (1994)	公立学校共済組合中国中央病院・日本鋼管福山病院
H7 (1995)	公立学校共済組合中国中央病院・日本鋼管福山病院・医療法人福山仁風荘病院 介護老人保健施設ピープル春秋苑・老人保健施設ハイトピアカイセイ・福山市立保育所
H8 (1996) ~ H14 (2002)	公立学校共済組合中国中央病院・日本鋼管福山病院・介護老人保健施設ピープル春秋苑 老人保健施設ハイトピアカイセイ・福山市立保育所
H15 (2003)	公立学校共済組合中国中央病院・日本鋼管福山病院・福山友愛病院・介護老人保健施設ピープル春秋苑 老人保健施設ハイトピアカイセイ・福山市立保育所
H16 (2004) ~ H20 (2008)	公立学校共済組合中国中央病院・医療法人社団日本鋼管福山病院・福山友愛病院 介護老人保健施設ピープル春秋苑・老人保健施設ハイトピアカイセイ
H21 (2009) ~ H26 (2014)	公立学校共済組合中国中央病院・医療法人社団日本鋼管福山病院・福山友愛病院・医療法人辰川会山陽病院 医療法人叙叙会福山第一病院・介護老人保健施設ピープル春秋苑 医療法人祥和会脳神経センター大田記念病院・老人保健施設ハイトピアカイセイ
H27 (2015) ~ R3 (2021)	公立学校共済組合中国中央病院・医療法人社団日本鋼管福山病院・福山友愛病院・医療法人辰川会山陽病院 医療法人叙叙会福山第一病院・老人保健施設ハイトピアカイセイ・福山循環器病院 特定医療法人社団宏仁会寺岡整形外科病院
R4 (2022)	公立学校共済組合中国中央病院・医療法人社団日本鋼管福山病院・福山友愛病院 就労継続支援B型事業所ゆうあい・老人保健施設ハイトピアカイセイ・介護老人保健施設ピープル春秋苑 医療法人辰川会山陽病院・福山循環器病院・福山市保育所・医療法人叙叙会福山第一病院 特定医療法人社団宏仁会寺岡整形外科病院・介護老人保健施設グリーンハウス宏喜苑
R5 (2023)	公立学校共済組合中国中央病院・特定医療法人財団竹政会セントラル病院 福山友愛病院・就労継続支援B型事業所ゆうあい・老人保健施設ハイトピアカイセイ 医療法人辰川会山陽病院・介護老人保健施設ピープル春秋苑・医療法人叙叙会福山第一病院・福山循環器病院 福山市保育所・特定医療法人社団宏仁会寺岡整形外科病院・介護老人保健施設グリーンハウス宏喜苑
R6 (2024) 3月迄	公立学校共済組合中国中央病院・特定医療法人社団宏仁会寺岡整形外科病院 特定医療法人財団竹政会セントラル病院・福山循環器病院・医療法人辰川会山陽病院 介護老人保健施設グリーンハウス宏喜苑・介護老人保健施設ピープル春秋苑・福山市保育所 老人保健施設ハイトピアカイセイ・認知症対応型共同生活介護グループホーム春 ももの花訪問看護ステーション・地域密着型特別養護老人ホーム夢ハウス コミュニティケアセンター北本庄・すまいる仁伍・福山友愛病院・就労継続支援B型事業所ゆうあい
R6 (2024) 4月～	公立学校共済組合中国中央病院・特定医療法人社団宏仁会寺岡整形外科病院・福山循環器病院 特定医療法人財団竹政会セントラル病院・医療法人辰川会山陽病院・介護老人保健施設グリーンハウス宏喜苑 介護老人保健施設ピープル春秋苑・認知症対応型共同生活介護グループホーム春 ももの花訪問看護ステーション・地域密着型特別養護老人ホーム夢ハウス・特別養護老人ホーム幸楽園 すまいる仁伍・福山友愛病院・就労継続支援B型事業所ゆうあい・福山市保育所

歴代の学校長



[初代校長]

松岡 賢一

昭和27(1952)年度~昭和32(1957)年度



[第二代校長]

猪原 修三

昭和33(1958)年度~昭和62(1987)年度



[第三代校長]

村上 貞夫

昭和63(1988)年度~平成元(1989)年度



[第四代校長]

大田 浩右

平成2(1990)年度~平成4(1992)年度



[第五代校長]

田邊 玄三

平成5(1993)年度~平成9(1997)年度



[第六代校長]

黒瀬 康平

平成10(1998)年度~平成13(2001)年度



[第七代校長]

細木 宣男

平成14(2002)年度~平成23(2011)年度



[第八代校長]

安藤 尚子

平成24(2012)年4月1日~平成30(2018)年6月24日



[第九代校長]

児玉 雅治

平成30(2018)年6月25日~令和2(2020)年7月31日



[第十代校長]

大石 豪彦

令和2(2020)年8月1日~現在



福山市医師会看護専門学校 高等課程准看護科

教職員名簿

年 度	校 長	担当事務	学校委員	副校長 教頭 教務課長	教務主任
昭和27 (1952)	松岡 賢一				
昭和28 (1953)	松岡 賢一				教務主任 鼓 幸子
昭和29 (1954)	松岡 賢一				
昭和30 (1955)	松岡 賢一				
昭和31 (1956)	松岡 賢一				教務主任 鼓 幸子
昭和32 (1957)	松岡 賢一	猪原 修三 平井 莉 村田 英太郎			
昭和33 (1958)	猪原 修三				教務主任 西野 白美
昭和34 (1959)	猪原 修三				教務主任 西野 白美
昭和35 (1960)	猪原 修三				教務主任 西野 白美
昭和36 (1961)	猪原 修三			教頭 平井 莉	教務主任 西野 白美
昭和37 (1962)	猪原 修三			教頭 平井 莉	教務主任 西野 白美
昭和38 (1963)	猪原 修三				教務主任 西野 白美
昭和39 (1964)	猪原 修三				
昭和40 (1965)	猪原 修三				教務主任 桑田 和子
昭和41 (1966)	猪原 修三				教務主任 桑田 和子
昭和42 (1967)	猪原 修三				教務主任 桑田 和子
昭和43 (1968)	猪原 修三				教務主任 桑田 和子
昭和44 (1969)	猪原 修三				教務主任 桑田 和子
昭和45 (1970)	猪原 修三	小池 誠			
昭和46 (1971)	猪原 修三				
昭和47 (1972)	猪原 修三	相原 正光			教務主任 桑田 和子
昭和48 (1973)	猪原 修三	学院主事 相原 正光			教務主任 原 紀子
昭和49 (1974)	猪原 修三	学院主事 相原 正光		副学院長 村田 英太郎	教務主任 原 紀子
昭和50 (1975)	猪原 修三	学院主事 相原 正光		副学院長 村田 英太郎	教務主任 原 紀子
昭和51 (1976)	猪原 修三	学院主事 村上 貞夫 相原 正光		副学院長 村田 英太郎	教務主任 原 紀子
昭和52 (1977)	猪原 修三	学院主事 村上 貞夫 相原 正光		副学院長 村田 英太郎	教務主任 原 紀子

年 度	校 長	担当理事	学校委員	副校長 教頭 教務課長	教務主任
昭和53 (1978)	猪原 修三	学院主事 楠本 剛 川崎 正輝		副学院長 村田 英太郎	教務主任 原 紀子
昭和54 (1979)	猪原 修三	学院主事 楠本 剛 川崎 正輝		副学院長 村田 英太郎	教務主任 原 紀子
昭和55 (1980)	猪原 修三	学院主事 楠本 剛 相原 正光		副学院長 村田 英太郎	教務主任 原 紀子
昭和56 (1981)	猪原 修三	学院主事 楠本 剛 相原 正光		副学院長 村田 英太郎	教務主任 原 紀子
昭和57 (1982)	猪原 修三	楠本 剛 相原 正光		副校長 村田 英太郎	教務主任 原 紀子
昭和58 (1983)	猪原 修三	楠本 剛 相原 正光		副校長 村田 英太郎	教務主任 原 紀子
昭和59 (1984)	猪原 修三	楠本 剛 柴原 正芳		副校長 楠本 剛	教務主任 原 紀子
昭和60 (1985)	猪原 修三	大田 浩右 柴原 正芳		副校長 楠本 剛	教務主任 原 紀子
昭和61 (1986)	猪原 修三	下村 董 松岡 巖		副校長 楠本 剛	教務主任 原 紀子
昭和62 (1987)	猪原 修三	下村 董 松岡 巖		副校長 楠本 剛	教務主任 原 紀子
昭和63 (1988)	村上 貞夫	岩崎 博		副校長 岩崎 博	教務主任 原 紀子
平成元 (1989)	村上 貞夫	岩崎 博		副校長 岩崎 博	教務主任 原 紀子
平成 2 (1990)	大田 浩右	小池 秀爾	野村 通誠・大味谷 輝男 仁紫 昌慶・古庵 雄三 廣畑 登・児玉 雅 小林 芳治・古中 信義 藤井 淳・細木 宣男 森近 茂・大日方 修 上田 節夫	副校長 小池 秀爾 教頭 桑田 和子	教務主任 原 紀子
平成 3 (1991)	大田 浩右	小池 秀爾	野村 通誠・大味谷 輝男 仁紫 昌慶・古庵 雄三 廣畑 登・児玉 雅 小林 芳治・古中 信義 藤井 淳・細木 宣男 森近 茂・大日方 修 上田 節夫	副校長 小池 秀爾 教頭 桑田 和子	教務主任 原 紀子
平成 4 (1992)	大田 浩右	小池 秀爾	野村 通誠・大味谷 輝男 古庵 雄三・廣畑 登 児玉 雅・小林 芳治 古中 信義・藤井 淳 細木 宣男・大日方 修 上田 節夫	副校長 田邊 玄三 小池 秀爾 教頭 桑田 和子	教務主任 原 紀子

年 度	校 長	担当理事	学校委員	副校長 教頭 教務課長	教務主任
平成5 (1993)	田邊 玄三	小池 秀爾	野村 通誠・大味谷 輝男 古庵 雄三・廣畑 登 児玉 雅・小林 芳治 古中 信義・藤井 淳 細木 宣男・大日方 修 上田 節夫	教頭 木村 ミノリ	教務主任 原 紀子
平成6 (1994)	田邊 玄三	小池 秀爾	橋本 雅明・檜崎 幹雄 竹政 敏彦・大味谷 輝男 安藤 尚子・高須 伸治 堀 一平・古中 信義 寺岡 俊人・神原 紘司 小林 道男・末丸 紘三	教頭 木村 ミノリ	教務主任 原 紀子
平成7 (1995)	田邊 玄三	小池 秀爾	橋本 雅明・檜崎 幹雄 竹政 敏彦・大味谷 輝男 安藤 尚子・高須 伸治 堀 一平・古中 信義 寺岡 俊人・神原 紘司 小林 道男・末丸 紘三	教頭 木村 ミノリ	教務主任 藤本 喜美子
平成8 (1996)	田邊 玄三	辰川 自光 小池 秀爾	大味谷 輝男・佐藤 昇樹 飯島 崇史・柴原 正芳 山元 勇・板崎 哲文 向田 幹雄・板野 正隆 三好 輝行・村上 忠正 松永 天・中郷 良藏 島倉 唯行	教頭 木村 ミノリ	教務主任 藤本 喜美子
平成9 (1997)	田邊 玄三	辰川 自光 小池 秀爾	大味谷 輝男・佐藤 昇樹 飯島 崇史・柴原 正芳 山元 勇・板崎 哲文 向田 幹雄・板野 正隆 三好 輝行・村上 忠正 松永 天・中郷 良藏 島倉 唯行	教頭 木村 ミノリ	教務主任 藤本 喜美子
平成10 (1998)	黒瀬 康平	辰川 自光 飯島 崇史	猪原 修三・法宗 駿 小池 秀爾・大石 典彦 末丸 紘三・瀬尾 憲司 橋本 雅明・藤本 英雄 奥坊 剛士・島倉 唯行 松永 天	教頭 木村 ミノリ	教務主任 藤本 喜美子
平成11 (1999)	黒瀬 康平	辰川 自光 飯島 崇史	猪原 修三・法宗 駿 小池 秀爾・大石 典彦 末丸 紘三・瀬尾 憲司 橋本 雅明・藤本 英雄 奥坊 剛士・島倉 唯行 松永 天	教頭 木村 ミノリ	教務主任 藤本 喜美子
平成12 (2000)	黒瀬 康平	飯島 崇史 佐藤 昇樹	小池 秀爾・辰川 自光 末丸 紘三・橋本 雅明 島倉 唯行・藤本 英雄	教頭 木村 ミノリ	教務主任 松岡 伸子
平成13 (2001)	黒瀬 康平	飯島 崇史 佐藤 昇樹	小池 秀爾・辰川 自光 末丸 紘三・橋本 雅明 島倉 唯行・藤本 英雄	教頭 木村 ミノリ	教務主任 松岡 伸子
平成14 (2002)	細木 宣男	飯島 崇史 兼森 博章 安藤 尚子	佐藤 昇樹・小池 秀爾 辰川 自光・末丸 紘三 橋本 雅明・三宅 晴夫 坂井 邦典	教頭 木村 ミノリ	教務主任 松岡 伸子
平成15 (2003)	細木 宣男	飯島 崇史 兼森 博章 安藤 尚子	佐藤 昇樹・小池 秀爾 辰川 自光・末丸 紘三 橋本 雅明・三宅 晴夫 坂井 邦典	教頭 木村 ミノリ	教務主任 松岡 伸子

年 度	校 長	担当理事	学校委員	副校長 教頭 教務課長	教務主任
平成16 (2004)	細木 宣男	前原 敬悟 兼森 博章	安藤 尚子・佐能 昭 飯島 崇史・小池 秀爾 辰川 自光・橋本 雅明 三宅 晴夫	教頭 木村 ミノリ	教務主任 松岡 伸子
平成17 (2005)	細木 宣男	前原 敬悟 兼森 博章	安藤 尚子・佐能 昭 飯島 崇史・小池 秀爾 辰川 自光・橋本 雅明 三宅 晴夫	副校長 森 泰久 教頭代行 木村 ミノリ	教務主任 松岡 伸子
平成18 (2006)	細木 宣男	安藤 尚子	前原 敬悟・兼森 博章 飯島 崇史・小池 秀爾 辰川 自光・島谷 英明 佐藤 昇樹	副校長 森 泰久	教務主任 三浦 ヒロエ
平成19 (2007)	細木 宣男	安藤 尚子	前原 敬悟・兼森 博章 飯島 崇史・小池 秀爾 辰川 自光・島谷 英明 佐藤 昇樹	副校長 森 泰久 教務課長 田口 早苗	教務主任 三浦 ヒロエ
平成20 (2008)	細木 宣男	安藤 尚子 大石 豪彦	前原 敬悟・兼森 博章 飯島 崇史・小池 秀爾 辰川 自光・島谷 英明 佐藤 昇樹	副校長 森 泰久 教務課長 田口 早苗	教務主任 児島 敏恵
平成21 (2009)	細木 宣男	安藤 尚子 大石 豪彦	前原 敬悟・兼森 博章 飯島 崇史・小池 秀爾 辰川 自光・島谷 英明 佐藤 昇樹	副校長 森 泰久 教務課長 田口 早苗	教務主任 児島 敏恵
平成22 (2010)	細木 宣男	安藤 尚子 大田 泰正 大石 豪彦 松岡 亮平	森近 茂・飯島 崇史 辰川 自光・前原 敬悟 黒瀬 康平・児玉 雅治 佐藤 昇樹・西岡 智司 金子 克彦	副校長 森 泰久 教務課長 田口 早苗	教務主任 児島 敏恵
平成23 (2011)	細木 宣男	安藤 尚子 大田 泰正 大石 豪彦 松岡 亮平	森近 茂・飯島 崇史 辰川 自光・前原 敬悟 黒瀬 康平・児玉 雅治 佐藤 昇樹・西岡 智司 金子 克彦	副校長 佐藤 正 教務課長 田口 早苗	教務主任 児島 敏恵
平成24 (2012)	安藤 尚子	児玉 雅治 志田原 泰夫 大石 豪彦 松岡 亮平	徳永 敬・細木 宣男 飯島 崇史・前原 敬悟 黒瀬 康平・西岡 智司 金子 克彦・池田 響子 森近 茂	副校長 佐藤 正 教務課長 田口 早苗	教務主任 児島 敏恵
平成25 (2013)	安藤 尚子	児玉 雅治 志田原 泰夫 大石 豪彦 松岡 亮平	徳永 敬・細木 宣男 飯島 崇史・前原 敬悟 黒瀬 康平・西岡 智司 金子 克彦・池田 響子 森近 茂	副校長 佐藤 正 教務課長 田口 早苗	教務主任 児島 敏恵
平成26 (2014)	安藤 尚子	志田原 泰夫 大石 豪彦 塚本 彰通	森近 茂・細木 宣男 前原 敬悟・飯島 崇史 徳永 敬・寺岡 俊人 治田 精一・島谷 英明 辰川 匡史・黒瀬 承平	副校長兼 教務課長 田口 早苗	教務主任 児島 敏恵

年 度	校 長	担当理事	学校委員	副校長 教頭 教務課長	教務主任
平成27 (2015)	安藤 尚子	志田原 泰夫 大石 豪彦 塚本 彰通	森近 茂・細木 宣男 前原 敬悟・飯島 崇史 徳永 敬・寺岡 俊人 治田 精一・島谷 英明 辰川 匡史・黒瀬 承平	副校長 田口 早苗 教務課長 小島 ひとみ	教務主任 児島 敏恵
平成28 (2016)	安藤 尚子	大石 豪彦 塚本 彰通 向井 省吾	森近 茂・細木 宣男 前原 敬悟・飯島 崇史 徳永 敬・寺岡 俊人 島谷 英明・辰川 匡史 黒瀬 承平・土屋 隆宏	副校長 田口 早苗 教務課長 小島 ひとみ	教務主任 児島 敏恵
平成29 (2017)	安藤 尚子	大石 豪彦 塚本 彰通 向井 省吾	森近 茂・細木 宣男 前原 敬悟・飯島 崇史 徳永 敬・寺岡 俊人 島谷 英明・辰川 匡史 黒瀬 承平・土屋 隆宏	副校長 田口 早苗 教務課長 小島 ひとみ	教務主任 児島 敏恵
平成30 (2018)	児玉 雅治	大石 豪彦 宮阪 英 奥村 みどり 椎木 滋雄	森近 茂・細木 宣男 前原 敬悟・飯島 崇史 徳永 敬・寺岡 俊人 島谷 英明・辰川 匡史 黒瀬 承平・土屋 隆宏	副校長 田口 早苗 教務課長 小島 ひとみ	教務主任 濱田 満美
平成31・令和 元 (2019)	児玉 雅治	大石 豪彦 宮阪 英 奥村 みどり 椎木 滋雄	森近 茂・前原 敬悟 徳永 敬・寺岡 俊人 黒瀬 承平・安藤 尚子 有木 則文・塚本 秀樹 新田 薫彬	副校長兼 教務課長 小島 ひとみ	教務主任 濱田 満美
令和2 (2020)	大石 豪彦	宮阪 英 奥村 みどり 内田 陽一郎	森近 茂・前原 敬悟 徳永 敬・寺岡 俊人 黒瀬 承平・安藤 尚子 有木 則文・塚本 秀樹 新田 薫彬	副校長兼 教務課長 小島 ひとみ	教務主任 濱田 満美
令和3 (2021)	大石 豪彦	宮阪 英 奥村 みどり 内田 陽一郎	森近 茂・前原 敬悟 徳永 敬・寺岡 俊人 黒瀬 承平・安藤 尚子 有木 則文・塚本 秀樹 新田 薫彬	副校長兼 教務課長 小島 ひとみ	教務主任 濱田 満美
令和4 (2022)	大石 豪彦	宮阪 英 内田 陽一郎 山崎 弘貴	森近 茂・前原 敬悟 徳永 敬・寺岡 俊人 有木 則文・作田 建夫 高橋 康太	副校長兼 教務課長 小島 ひとみ	教務主任 濱田 満美
令和5 (2023)	大石 豪彦	宮阪 英 内田 陽一郎 山崎 弘貴	森近 茂・前原 敬悟 徳永 敬・寺岡 俊人 有木 則文・作田 建夫 高橋 康太	副校長兼 教務課長 小島 ひとみ	教務主任 濱田 満美
令和6 (2024)	大石 豪彦	奥村 みどり 山崎 弘貴 神原 健	前原 敬悟 児玉 雅治 徳永 敬 寺岡 俊人 内田 陽一郎 有木 則文 作田 建夫 高橋 康太	副校長 小島 ひとみ 教務課長 濱田 満美	教務主任 濱田 満美

注) 年度途中での体制変更については、新体制で記載しています。



福山市医師会看護専門学校校歌

QRコードをスキャンすると、
校歌が流れます。

作詞 一回生 (S.51卒)
補筆 瀬尾清幸
作曲 原田辰己
編曲 原田賢一



く ま が み ね の ぞ み を し め す あ お ぞ ら に み
あ ま だ が み わ か し ぞ の を が れ す は お ぎ ら さ と
と も の の う ら し お の と お な り な る よ る は



と — り の み ち — を ひ ら か り ん と
も — の な ら や み — の な こ い り な が く
ら — か ら の さ — ち こ い ね が い



ち か い は あ ら た に め に し る し あ あ — ふ く や ま か ん こ の
も — ろ の き か い な い ね さ ね に え あ う
し — ろ き し め い を む ね に ひ む



ま な び や に あ し た を つ く る わ れ — ら あ り
に あ に ゆ な る む

一 熊が峰 理想を示す 蒼空に 看とりの道を拓かん 誓いは新たに あ、福山看護の 学び舎に	二 芦田川 川の流れの 速き朝 明日を創る われらあり	三 明日を歩む われらあり 三 帆の浦 潮の遠鳴り 鳴る夜は 同胞の幸こいねがい 白き使命を胸に秘む あ、福山看護の 学び舎に	四 明日を担う われらあり あ、福山看護の 学び舎に
---	---	--	--

73 years

The Fukuyama
Medical Association School of Nursing

写真と振り返る思い出

教科外活動

目的

看護を学ぶものとしての自覚と責任、看護を探究する向上心を持ち、集団の中でよりよい生活を営む力となる協調性や主体性を持つ人間形成を目指す。

入学式

本校の生徒としての自覚を持ち看護を学ぶ動機づけとして入学式を挙行。
入学生代表が誓いの詞を宣誓し、本校の生徒として入学を許可される。
1992年4月～ 准看護科・第二看護学科の合同入学式となる。



26期生・1977年



36期生・1987年



45期生・1996年



50期生・2001年



60期生・2011年



69期生・2020年



72期生・2023年

新入生オリエンテーション

入学後の学校生活がイメージでき、級友との交流を図るために内海町の海でカッター漕ぎ、神勝寺にて座禅の体験学習を行う。

1994年(41期生)～2003年(50期生)
みろくの里(福山市藤江町)の研修棟にて新入生のオリエンテーションを開催。



43期生・1994年



45期生・1996年



46期生・1997年



49期生・2000年



遠足・新入生歓迎球技大会



10期生・1963年

看護を学ぶ仲間として交流を深める為に、1958年(5期生)は、草戸の明王院に遠足。

翌年、尾道の千光寺、芦田川の潮干狩り、田尻の海水浴、福山城に遠足に行く。

1987年～ 新入生歓迎球技大会に変更となる。



14期生・1967年



35期生・1988年



44期生・1997年



52期生・2005年



60期生・2013年



63期生・2016年

運動会

日頃の運動不足を解消し、楽しいひと時を過ごし交流の場として開催。
 校長、担当理事、医師会関係者、教職員も参加している。
 1965年（12期生）からは、紅葉町の時は西小学校のグラウンドを使用。
 三吉町に移転後は、東中学校のグラウンドを借り2003年（50期生）まで開催。



14期生・1967年



20期生・1973年



33期生・1986年



25期生・1978年



38期生・1991年



35期生・1988年



46期生・1999年



44期生・1997年



看護の日

看護の日が制定された意義を理解し、看護の重要性を認識するために 1986 年から看護の日を開催。
 1994 年～ 2013 年まで各学年の代表者が看護の体験を発表後に記念講演を受講。
 2014 年～ 2024 年は、記念講演のみの開催となる。



33 期生・1986 年



55 期生・2008 年



44 期生・1997 年



66 期生・2019 年



72 期生・2024 年

戴帽式

看護の心を受け継ぎ、看護に携わる決意を再認識する目的で 1963 年（10 期生）から開催。
 戴帽・戴灯後に「ナイチンゲール誓詞」の斉唱を行う。
 2013 年～准看護科と第一看護学科との合同の式典となり「誓いの詞」を学生・生徒で斉唱に変更となる。



11 期生・1962 年



33 期生・1984 年



49 期生・2000 年



54 期生・2005 年



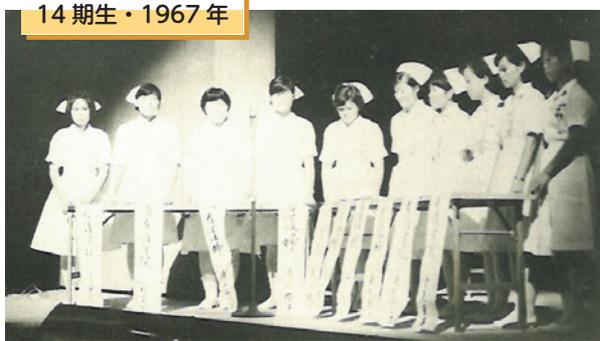
60 期生・2011 年



72 期生・2023 年

看護学習発表会・学校祭・学習発表会

学生の自主的活動の成果を発表し探究心や協調性を培い、看護への学習意欲の向上の機会として開催。1966年(6期生)～1988年(35期生)まで広島県下の生徒が一同に集まり看護学習発表会として開催。1993年(40期生)～学内での学校祭となる。2015年(62期生)～学習発表会に変更となる。



14期生・1967年



26期生・1979年



35期生・1988年



40期生・1993年



51期生・2004年



67期生・2019年



71期生・2023年

修学旅行

見聞を広め、情緒を豊かにするため 1958 年(5 期生) から四国の金毘羅、米子、宮島、秋吉台、熊本、別府、能登、信州、沖縄、北海道、ユニバーサルスタジオ・ジャパンなどに旅行。生涯忘れることのない楽しい思い出となっていた。経済的に困難となり 2014 年(61 期生) で中止となる。



5 期生・1957 年



10 期生・1962 年



6 期生・1958 年



25 期生・1977 年



47 期生・1999 年



37 期生・1989 年



61 期生・2013 年

研 修

ハンセン氏病の歴史を知り、命と人権について考え看護に携わるものとしての自覚を持つことを目的として1958年(5期生)より国立療養所長島愛生園にて島内・施設見学とハンセン氏病の方からの講話を頂く。



6期生・1958年



8期生・1960年



53期生・2005年



57期生・2009年



60期生・2012年



72期生・2024年



授業風景



23期生・1976年



31期生・1984年



62期生・2015年



69期生・2022年



7期生・1960年



32期生・1985年



60期生・2013年



71期生・2023年

卒業式

本校における教育が修了したことを認識し、職業人として新たな出発点となることを自覚する。
在校生は卒業生の門出を祝福する。



7期生・1960年



33期生・1986年



58期生・2011年



10期生・1963年



27期生・1980年



43期生・1996年



69期生・2022年



71期生・2024年

編集 後記

福山地域における看護職（産婆、看護婦）の養成は、明治時代後期に遡るという記録がありますが、「福山市医師会附属」との名を冠した産婆看護婦の養成所が誕生したのは、1920（大正9）年のことでありました。空襲で記録を焼失したために、学校の運営や授業などについての当時を偲ぶ詳細の大部分は不明ですが、残された卒業証書番号から推測すると、終戦となった1945（昭和20）年までに、計845人以上の卒業生を送り出したようです。

本医師会の「准看護師」の養成事業の礎石となったのは、戦後、我が国で准看護師制度が創設されたのを機に、1952（昭和27）年、「福山市医師会附属准看護師養成所」として新たな船出をした時にまで歴史は遡ります。

この度、准看護科を閉科するに当たり、本校の歴史の節目として記念誌を発刊することといたしました。記念誌の編集にあたる中で、この73年間という航跡を辿りながら、医師会が看護職養成に如何に心血を注いできたかに思いを致すとともに、先人や先輩、そして多くの関係者の方々への感謝の念を改めて深めることが出来ました。また、巣立っていった多くの卒業生に思いを馳せ、ときには涙しながら頑張りを、互いに支え合いながら看護の心を育み巣立っていったであろう姿が彷彿とされました。

いま、看護師等養成所を巡る情勢が、本医師会のみならず全国的に非常に厳しい状況にある中、准看護科と第二看護学科を順次閉科するという本校の再編計画は、この地域の医療・介護現場に看護人材を将来に亘って安定的に送り出していくための苦渋の選択でもありました。

今後は、現在の第一看護学科の定員を増やし、医師会員の皆さんはもとより、多くの関係者の皆さまのご支援を頂きながら、医師会役員、教職員が一丸となり、看護師の養成事業に専心努力して参りたいと思います。

2025（令和7）年3月
准看護科記念誌編集委員会
編集委員 一同

准看護科 校章



裏表紙に印刷してあるのは、准看護科の校章です。准看護科の校章は、福山市の市章である「蝙蝠と山」を基に図案化されました。また、中央部にある十字のマークは、記録には残っていませんが傷ついた人々を救護するという意味で表現されたと思われます。

昭和31（1956）年第5期生のアルバムから校章マークが記載されています。第1期生から第4期生までは使用されたかは不明です。

平成23（2011）年4月から第一看護学科開設にあたり、第二看護学科と准看護科の3課程合同の現在の校章に変更されました。

准看護科記念誌編集委員会

前原 敬悟
徳永 敬
児玉 雅治
大石 豪彦
奥村 みどり
山崎 弘貴
神原 健



福山市医師会看護専門学校